

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 祭り文化の再生と地域活性化

7

2010

ISSN 1340-8917

1 巻頭エッセー ● 日本再生は道州制にあり

鈴木康友（浜松市長）

特集 祭り文化の再生と地域活性化

- 4 祭りを地域政策として考える 伊多波良雄（同志社大学経済学部教授）
- 8 青森県黒石市 15年ぶりに櫓建設、黒石よされ 柴田正大
- 10 山形県村山市 「徳内まつり」で郷土愛を醸成 結城文俊
- 12 千葉県九十九里町(田中地区) 廃田畑を復元、新旧住民が交流 城 茂樹
- 14 新潟県佐渡市 伝統芸能の存在が集落の絆に 松田幸子
- 16 愛知県名古屋市長 市民総参加の祭りづくり 水野孝一
- 18 三重県尾鷲市 「宝来栄」が38年ぶりに復活 三鬼和昭
- 20 京都府長岡京市長 歴史資源の掘起しで地域再生 山方久蔵
- 22 兵庫県養父市長 住民の手で農村歌舞伎を復活 安達洋道
- 24 鳥取県鳥取市長 〴〵日本の祭り、めざし市民祭り改変 鷲見宣幸
- 26 香川県三豊市長 商工会の努力で住民参加の行事に 三宅靖夫
- 28 愛媛県西条市長 合併後も丹原の独自性残し復興 一色忠政
- 30 大分県佐伯市長 高齢化で途絶えた祭りを復活 佐藤栄伸
- 33 祭りは地域の救世主になれるか 二瓶長記（地域創造プロデューサー）

レギュラーレポート

- 38 移住・交流事業 三重県伊賀市長 美味と景観を重視して交流促進 小林康志
- 団体探訪
- 40 角館まちづくり研究所 角館外町の「蔵」を後世に残す活動 秋田県仙北市長
- 42 NPO法人寝屋川市駅周辺まちづくりネットワーク 地域への愛着がまちをつくる 大阪府寝屋川市長
- 44 ～北から南から～ 長崎県雲仙市長 〴〵日本一長い足湯、の効果 山下浩一
- 45 首長の思い 人と文化が躍動する「環境創造都市」を目指して 白倉政司（北杜市長）
- 48 センター通信

グラビア

- 2 祭り文化の再生と地域活性化
- 46 都道府県漫遊 ● 三重県 47 手前みそですが… ● 群馬県渋川市



毛利元就の孫、吉川元長が建立した万徳院跡歴史公園（国史跡）



弘法大師が開基したと伝えられる古保利薬師（国重要文化財）



世界でこの地にしか自生していない、学術的にも珍しい天狗シデ群落（国の天然記念物）



天意の里ハーブガーデン



飾り牛による代掻き



田植え唄を歌いながら田植する早乙女たち

春から初夏にかけて、各地でその年の豊作を願う田植祭りが行われる。広島県芸北地方の北広島町では、六月第一週の日曜日、国指定重要無形民俗文化財に指定されている「壬生の花田植」が行われた。

この地方の花田植は歴史も古く、中世にまで遡る。花田植の元とは「組田植え」「大田植え」と言われ、十戸程度で組をつくり共同で年々家を回り、田植えをしていた。組田植えなどの際、囃し手が太鼓・小太鼓・横笛などで賑やかにはやし、それに合わせて早乙女が田植え唄を歌いながら作業した。この囃し田の華やかさから「花田植」と呼ばれるようになったという。

当時の様式をそのままに伝承し、貴重な民族芸能として注目されることから、昨年、ユネスコに世界無形文化遺産として推薦された。この話題もあって、周辺各地からの見物客はこの一二年増えている。

花田植では、十三頭の飾り牛による代掻きも披露されたが、宮崎県で発生した口蹄疫の影響もあり、関係者らは消毒薬をまくなど対策にも気を遣っていた。

●文：原田 ●カメラマン：小形又男

表紙Ⅱ壬生の花田植

（広島県北広島町）

日本再生は道州制にあり

浜松市長 ● 鈴木康友



最近、フィンランドの成功が注目されている。かつての欧州の後進国が、今や世界のトップランナーになった。しかしフィンランドの人口はわずか五百七十万人だ。ちょうど静岡県と長野県を合わせると、そのくらいの人口になる。この規模だからこそ大胆な改革もできるし、変化も起こせる。つまり規模というものは、改革を行う際にとっても大事な要素である。日本一国が単位ではサイズが大き過ぎる。そこで私は道州制を実現し、日本をいくつかに分ける必要があると考えている。適正なサイズに分割すれば、それぞれの地域で独自の成長戦略を描けるし、東京一極集中も解消される。

道州制においては、行政サービスの中心は基礎自治体に置き、広域行政や域内全体の経済戦略、それに基づく経済外交などは道州が担う。国は安全保障、通貨管理など、国家としての最低限の機能だけを行う。

浜松市や新潟市のように大合併の末、政令指定都市になった自治体は、道州制移行時の基礎自治体のモデルになると考える。例えば浜松市についていえば、平成十七年に十二市町村が合併して人口八十二万人の政令指定都市になったが、旧浜松市が人口六十万人、他十一市町村は規模の小さな自治体だった。そこで現在でも市内に過疎と呼ばれる地域が四地域、百を超える限界集落がある。

政令指定都市といっても、五大市のような大都市と違い、条件の有利な地域ではない。にもかかわらず自立した都市経営を行っている。このように全ての基礎自治体を浜松や新潟のように再編すれば、日本全体を自立可能な基礎自治体の集合体に変えることができると思う。

将来の道州制をにらみ、県の枠組みにとられない動きも出てきた。私どもの地域では、三遠南信広域連携という県境を越えた連携を推進している。三遠南信というのは、

豊橋市を中心とした愛知県東部（東三河）、浜松市を中心とした静岡県西部（遠州）、飯田市を中心とした長野県南部（南信州）の三地域の総称である。

平成五年から行政、経済界、市民団体などが参加して、三遠南信サミットという交流事業を推進してきた。平成二十年三月には、三遠南信地域連携ビジョンが策定され、浜松市役所内に三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SEN A）事務局も設置された。

ここには豊橋市、飯田市からも職員が出向している。三遠南信地域連携は新たな段階へステップアップし、昨年の第十七回サミットにおいては「連携」から「融合」へという決断を行った。県をまたいだ連携でこうした決断が行われるということは画期的だと思う。

三遠南信地域は、県域人口で二百三十万人。仮に県に置き換えて考えると、製造品出荷額は十三兆円で全国第六位。農業産出額は三千億円で第七位など、いずれも上位に位置づけられる。県としても相当の実力を持っていることになる。元々県並みの実力を有する地域として、県を強く意識してきた経緯がある。いっそのこと新しい県を立ち上げた方がいいのではないか、という気にもなってくる。

三遠南信地域の自立が、地域主権改革の突破口になることを目指したい。地域主権改革がこれまでの地方分権と違うのは、国から押しつけられた枠組みではなく、地域自らの意志でその枠組みさえも決めて、自治を推進することにある。

従って全国で三遠南信地域同様、新しい自治体の枠組みを模索する動きがもつと出てきてもよい。現状の三層制を前提に、多少の権限や財源の移譲を繰り返しても、何も新しいものは生まれてこない。日本が本当に再生するためには、真の地域革命を起こさなければならない。

祭り文化の再生と地域活性化



徳内まつりに参加する若いパワー ● 山形県村山市 (p10-11)



黒石よされには地元よさこい演舞チームも参加
● 青森県黒石市 (p8-9)



耳で覚えた太鼓を披露 ● 新潟県佐渡市 (p14-15)



「むしおくり」の主役、竹とわらで作った大やぐら
● 千葉県九十九里町（田中地区）(p12-13)



宝来栄で道中行列 ● 三重県尾鷲市 (p18-19)



につぼんど真ん中祭り、中区・久屋大通公園会場の様子
● 愛知県名古屋市 (p16-17) ©につぼんど真ん中祭り



一般公開される葛畑の舞台 ● 兵庫県養父市 (p22-23)



商店街の店舗に作られた「八朔人形まつり」の舞台飾り ● 香川県三豊市 (p26-27)



木浦鉾山区民の無病息災を願う「すみつけ祭り」 ● 大分県佐伯市 (p30-32)

第一回

鴻臚祭り



SHIBANOSATO
40th Anniversary

柴の里自治会

復活した鴻臚祭りのポスター

● 京都府長岡京市 (p20-21)



「しゃんしゃん祭」の呼び物「一斉傘踊り」

● 鳥取県鳥取市 (p24-25)



大人に交じって子ども御輿楽車をひく

● 愛媛県西条市 (p28-29)



祭りを地域政策として考える

—政策担当者には分析能力・知識が必要—

さまざま祭り

戦後、地方から首都圏あるいは関西圏に人々が移動した結果、少子高齢社会を背景に、地方は高齢化が急速に進んでいる。さらに、グローバルゼーションは企業を海外に追いやリ、雇用機会が減少している。

同時に、新自由主義経済思想を背景に人々の権利意識が高まった結果、地方だけでなく都会でも人のつながりの関係は希薄化している。このような状況の中で、祭りは殺伐とした人々の関係に潤いを与えてくれる。

祭りが日本で盛んである。タレントの宮川大輔氏が世界各地の祭りに参加する模様を放映するテレビ番組もある。有名な祭りとしては、京都の葵祭・祇園祭・時代祭、大阪の天神祭、青森のねぶた祭、秋田の竿灯などがすぐ思いつく。海外でも、

リオのカーニバルやザルツブルグ音楽祭など数多くある。

最近では、本誌で紹介されているように、全国各地で祭りが見直され、開催されている。こういった祭りは、地域で古くから行われてきたものであり、一時中断し、再開されたものもある。古くから引き継がれたものばかりではなく、一九九〇年代前半に北海道から全国に広まったYOSAKOIソーラン祭りのように新たに作られたまつりもある。

佐藤・保田編(二〇〇六)は日本の祭りを紹介している。その数は合計すると、千百一件になる。人口一万人当たりで一番祭りが多い県は秋田県であり、次に奈良県、島根県、福井県と続く。

人口一万人当たり祭り数と人口一人当たり県内総生産の相関係数はマイナス〇・二六三となり、経済水準が低い地域で祭り数が多い。祭りを経済学的にどのように解釈することができるであろう



同志社大学経済学部教授 ● 伊多波良雄

か。

以下では、祭りをソーシャル・キャピタルとして捉えた上で、祭りを地域政策として位置付けることができ、今後行政の役割が増大することを指摘する。

ソーシャル・キャピタルとしての祭り

祭りという場合、これに関係するものとして、たとえば京都では、祇園祭、壬生狂言、久多の花笠踊りなど様々な名称の祭り文化伝承がある。ここではこれらを区別しないで、単に祭りという名称を使う。

柳田監修編(一九七〇)では、祭りを「神霊をよび迎えてこれに供献侍座し、以てそれを慰め和しめること」と定義している。しかし、現代においては、芸術祭のように芸術の表現の場であったり、地域の活性化のための仕組みとして見直された



りするなど、多面的な角度から捉える必要がある。

祭りを考える際に有益な概念はソーシャル・キャピタル(Social Capital)である。ソーシャル・キャピタルにはいくつかの定義があるが、イタリアの南北の経済格差を説明する際にパットナムによって導入された概念が有名である。

パットナムの近年の考えを著している柴内訳(二〇〇六)では、ソーシャル・キャピタルを「人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義している。

さらに、ソーシャル・キャピタルは「結束型」と「橋渡し型」に分類される。「結束型」は、組織あるいはコミュニティの結束を強化する機能を持つ。

他方、「橋渡し型」ソーシャル・キャピタルは、様々な組織やコミュニティの間のネットワークを形成する機能を持つ。

大守(二〇〇四)は情報の不完全性、市民的成熟、インセンティブを通じた影響、その他の重要な経路の四つの観点から、ソーシャル・キャピタルの経済効果のミクロ的チャンネルを挙げている。

第一は、情報の不完全性に関するものである。ソーシャル・キャピタルの存在によって、ネットワークを通じて情報収集のコストが安くなった、価値観を共有することにより交渉がスムーズに行われたりするなどのメリットがある。

第二は、ソーシャル・キャピタルにより市民は成熟し、このことにより市民はネットワークを十分使いこなすことができたり、政府活動の効率性

に影響を及ぼしたりすることができるといえる点である。

第三は、ソーシャル・キャピタルの存在が人間のインセンティブに及ぼす影響であり、たとえば人的資本の蓄積の増大、ビジネス・チャンスや地域文化の創出などが考えられる。

また第四に、その他の重要な経路として、ソーシャル・キャピタルは社会を安定にし、貯蓄率を高めたり、帰属意識を高めることによって、地域の自律性を増大させたりするなどの効果も考えられる。

最近では、ソーシャル・キャピタルを計測する試みが行われている。その中で、つきあい・信頼・社会参加などの観点から調査している内閣府のいくつかの試みがある。そこでは、祭りに相当すると思われる活動への参加があり、こういった活動はソーシャル・キャピタルを形成すると想定されている。

このように、ソーシャル・キャピタルの及ぼす影響と実際のソーシャル・キャピタルの計測事例を考慮すると、祭りをソーシャル・キャピタルとして捉えることが可能である。

祭りは「結束型」あるいは「橋渡し型」か

祭りをソーシャル・キャピタルとして捉える場合、「結束型」あるいは「橋渡し型」のいずれで捉えることができるであろうか。

これは祭りの性格あるいは規模による。氏神を祀ったりする地方の祭りは、コミュニティの結束を高めるためのものと考えることができ、パット

ナムでも触れられているように、「結束型」のソーシャル・キャピタルである。

京都の葵祭・祇園祭・時代祭のように規模が大きい祭りは、観光客を多く受け入れている。こういった大規模の祭りは開放的であり、「橋渡し型」と考えることができる。

しかし、規模が大きい祭りは資金的にも大きな問題を持っており、開催するためには地元の協力が欠かせない。そのためには開催する地域では結束が強くなければならない。

このことを考えると、このような規模の大きい祭りは「橋渡し型」だけではなく「結束型」の性質も併せ持っている。先に紹介したYOSAKOIソーラン祭りも、同様にこれら二つの性格を持っていると言えよう。

祭りの経済波及効果

祭りは経済的に二つの側面から評価することができる。第一は、地域活性化の側面、第二は祭りの持つ様々な価値の側面である。

第一は、いわゆる経済波及効果であり、祭りにより発生した費用(主催者による費用など)や需要(観光客需要など)を直接効果として求め、ここから波及する効果を産業連関表などを用いて波及効果として求める方法である。

この観点から、全国の祭りの経済波及効果を分析したものに財団法人・地域伝統芸能活用センター(二〇〇三)がある。

なまはげ(秋田県)、会津坂下大俵引き(福島県)など六つの祭りを対象としている。

地域内需要総額を実施の実施費用で除した地域経済への効果は、一・九から九・八二と計測しており、ばらつきが大きい。

このような差が生じた原因は、一つには祭りの性格によるものである。しかし、重要なことは、こういった分析を通じて祭りの性格がより把握できるといふ点にある。このことによって、新たな課題が発見できたり、波及効果を引き上げるための提案が考案されたりする。

たとえば、この調査では、祭りが行われる場合、伝統行事と組み合わせたり、近隣の地域で行われている祭りを組み合わせて全体として大規模化したりすることによって、効果が増大することも示唆している。

先に、指摘したように経済活動が低い地域で祭り数が多い。こういった地域で地域活性化のために祭りを有効に役立てる余地があると言えよう。

祭りの価値

第二の側面は、祭りが持つ様々な価値であり、先に紹介したソーシャル・キャピタルを通じてもたらされた価値である。

帰属意識を高めることによって地域のアイデンティティが醸成されたり、地域の自律性が確保されたりする。祭りを通じて、伝統芸能が保存・継承されたりすることもある。こういったことを通じて、豊かな地域社会が形成されていくことが期待される。

高秀・高岡・永井（二〇〇四）は、祭りは様々な価値を持っているものと考えて、新しい催し、

伝統的な催し、露天商などの観点から祭りの価値を求める試みをしている。

この第二の側面の価値は住民の満足度を高めることが期待され、今後、重要さをより増していくものと考えられる。

祭りの価値を測定した研究として伊多波・八木（二〇〇九）を紹介する。これは、

日本に住む十八歳以上の男女を対象に二〇〇八年三月（回収数千二百件）、インターネット会社に依頼したアンケート調査個票データを用いている。

京都三大祭りを対象にしたもので、祭りを維持するための支払意思額を尋ね、仮想的市場評価法（CVM）によって価値が測定された。

この分析によると、総便益は葵祭九

表 訪問頻度と印象の相関係数

	全体	魅力	新鮮さ	先進	清潔	もてなし	交通	バリアフリー	物価	治安	公共施設	表示
相関係数	.082	.121	-.001	.072	.035	.047	.091	.006	-.065	.112	.088	.079
有意確率 (両側)	.008	.000	.969	.019	.256	.129	.003	.856	.036	.000	.004	.011
標本数	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056	1056

百三十一億円、祇園祭九百九十九億円、時代祭八百八十三億円となることが示されている。

祭りの純便益を導出するためには、費用を推定しなければならぬが、実際の運営はかなり複雑で、今回の調査では得られていない。分析過程で得られた興味深い点として、京都への訪問頻度と京都に対する印象の相関係数が挙げられる。

アンケート調査では、訪問頻度と京都の印象（五段階）を尋ねており、これらの相関は表のとおりである。京都全体、魅力、先進、交通、物価、治安、公共施設、表示などが5%の有意水準で訪問頻度と関係があり、印象がよければ訪問頻度が多くなることを示している。

このことから、祭りを見物しに来たときは、その土地の印象を良くすることが、リピーターを増やす上で重要であることが分かる。

また、分析からは印象が良ければ、支払意思額が高くなるということが明らかにされている。印象が良ければ訪問頻度が高くなるので、Snowball（二〇〇五）が議論したように、この値には将来の価値、すなわちオプション価値を反映している可能性はある。

ここでは示していないが、年齢が低いほど支払い意思額が高くなる傾向がある。このことは、祭りの価値には何らかの形でオプション価値が含まれていることを示している。

企業と祭り

企業は祭りをどのように考えているのであろうか。企業自体が祭りを作り、開催していったり、



図1 企業の地域貢献の形態

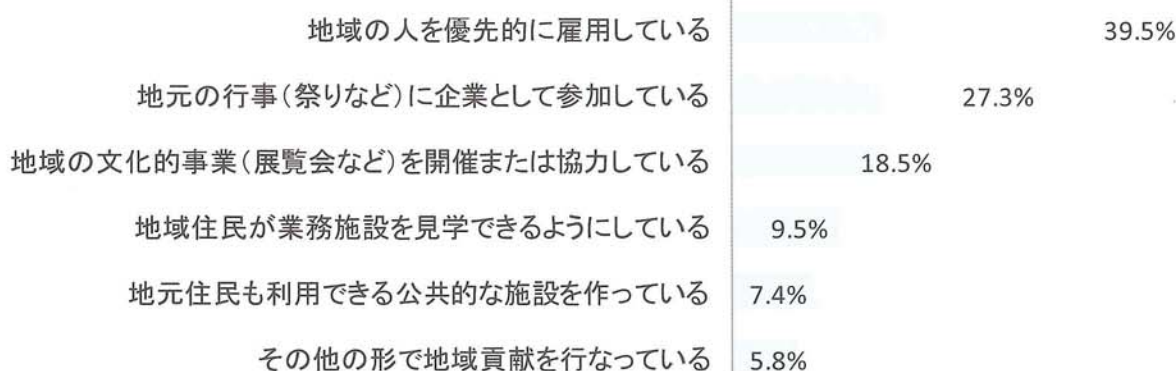
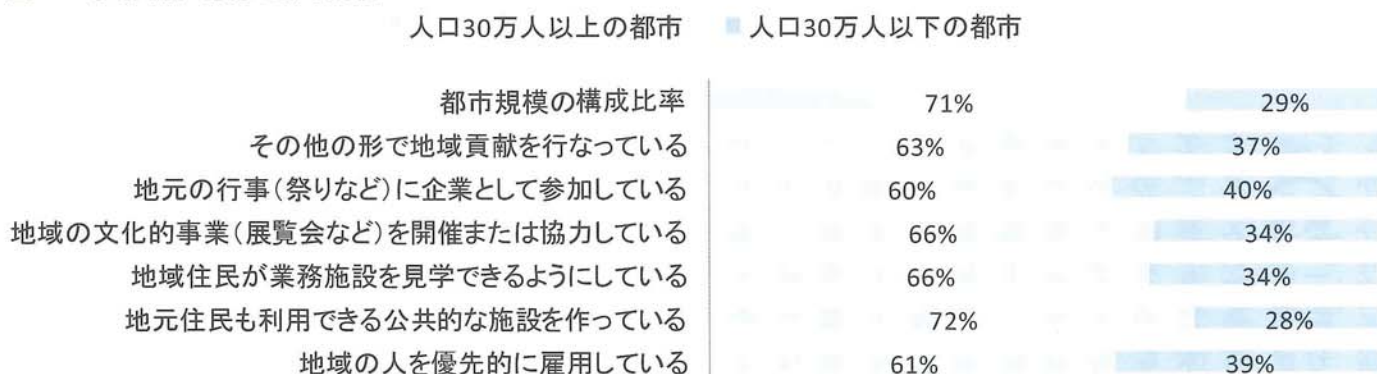


図2 地域貢献の形態と都市規模



既存の祭りに何からかの形で参加していったりすることが考えられる。この点についてアンケート調査を紹介する。

このアンケート調査は、科学研究費補助金(基盤研究A)による研究「地域間格差生成の要因分析と格差縮小政策(研究代表者・橋本俊詔)」のもとで行われたアンケート調査(調査名「企業立地の地域間格差に関するアンケート調査」)である。

調査時点(二〇〇八年一月)において、企業で社長(個人経営者も含む)、会長、取締役、役員、部長職などの幹部職についている人たちを対象にしている。アンケートはネット会社に依頼した。調査配信数は四千五百件、回収率は二千三百三十件、回収率は四七・三%である。

図1は祭りを含む企業の地域貢献の形態を示している。何らかの形で地元地域に対して地域貢献を行っている企業は八百三十件であり、これは二千三百三十件の回答者の三九%に相当する。

地域貢献に対する回答として、地元の行事(祭りなど)に企業として参加している回答は、二七・三%と地域の人を優先的に雇用している回答に次いで高い割合を示している。企業にとって、祭りは地域と関係を築く上で重要な要素であることを示している。

また、企業の地域貢献を都市規模別に見たのが、図2である。人口三十万人を境に都市規模を大都市(三十万人以上)と小都市(三十万人以下)に分けてみると、地元の行事(祭り)に企業として参加しているケースは、大都市では六〇%、小都市では四〇%であり、大都市の比率がやや高い。

この状況は、地域の人を優先的に雇用しているケースと同じ傾向である。回答者の都市規模の構成比率は、小都市が二九%であるから、小都市において、祭りの存在が企業と良好な関係を築く上でより重要な要素であることを示している。

増大する行政の役割と必要な分析能力・知識

これまで見てきたように、祭りは住民と企業にとって重要であり、地域に対して様々な影響を及ぼしていることが期待することができる。それぞれの祭りには特徴があるので、波及効果も異なってくることを考えると、祭りを効果的に運営していくためには、祭りの訪問客の属性や地域内での消費行動などを調査する必要がある。

(以下、32ページに続く)



15年ぶりに櫓建設、黒石よされ

—まちの商業活性化、観光客増めざす—

黒石商工会議所専務理事 ● 柴田正大

三大流し踊りの一つだが、知名度ではまだ劣る

祭り提灯に、紅白で彩られた櫓、若い男女の浴衣姿、まばゆく輝く屋台の明かり……。

全国いたるところで開催される盆踊りは、いかにも日本情緒を感じさせる風物詩であり、地域のコミュニティにも貢献する、現代においては貴重なイベントといえるだろう。

しかし、こと首都圏においては、踊りの曲目は「炭坑節」や「ソーラン節」といった他の地方の民謡をアレンジしたもの、あるいは「ドラえもん音頭」などアニメ曲が多く、地元で昔から受け継がれてきた民謡であることは少ない。しかも、踊りの演奏もCDによる「放送」である場合がほとんどである。

そこで、わが黒石市の盆踊りである「黒石よされ」の自慢を申し上げたい（全国に発信できる機会はそのようなのでチカラが入ります）。

まず、黒石よされの曲目は「黒石よされ」をはじめ「黒石じょんから」「黒石甚句」「ドダレバチ」

とすべて地元民謡に由来、もしくは地元オリジナル創作であるという点だ。

そして、その演奏は幼いころから鍛えに鍛えあげてきた地元のプロ、もしくはセミプロによる「生演奏」であるという、絶対的な正統性で全国に自慢したい祭りなのである。

加えて、日本三大流し踊りの一つとして、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された中町こみせ通りを含むレトロな街並みを、延べ約四千人以上の踊り手が舞い踊る「流し踊り」、またチーム編成で舞台上で披露される華麗な「組踊り（津軽民謡手踊り）」、さらに櫓のまわりを幾重にも輪を作りながら踊る「廻り踊り」と、それぞれに魅力のある三本柱で構成されている。

その多様性において、きわめて個人的にはあるが、盆踊りの総本山と呼びたい祭りが黒石よされ、なのである。

櫓の老朽化、商店街衰退と軌を一に廻り踊り中断

しかし、日本三大流し踊りの残りの二つ、徳島

県の阿波踊り、岐阜県の郡上踊りに比べると、その知名度、観光客数、地域への経済効果においてきわめて劣っている。全国と比べるとなく、この青森県の祭りの中でも、先人がさまざまな形で努力してきたにもかかわらず、次第に衰退し埋没してきていた。

しかも三本柱の一つであった、市内中心部にある広場「御幸公園」に櫓を建てての廻り踊りは、一部熱心愛好家によつて駅前まで続けられてきたものの、櫓の老朽化と経済の低迷による資金難で長らく中断されていた。それは中心商店街の衰退とイコールであると言っても過言ではない。

青森の「へつちよ（へそ）」の愛称もある黒石市は、青森県のほぼ中央に位置し、西に津軽平野と岩木山、東に八甲田連峰、十和田国立公園と豊かな自然環境に恵まれ、昔から「米とりんごといで湯の里」として知られる鄙びた城下町だ。

人口四万足らずのこの黒石が、がぜんにぎわいを見せるのが八月の黒石ねぶた祭り（七月三十日～八月五日）と、そして本市最大の祭りである「黒石よされ」（八月十四日～八月二十日）である。

わずかひと月の間に、市を挙げて一週間も続く祭りが二回も開催されるまちは、日本中でもあまり例がないのではないかと、と思われる。

江戸期に商業振興策として
領内の盆踊りを奨励

「民謡の宝庫」といわれる津軽地方で、津軽じょんから節の発祥の地とされている黒石は、古くから盆踊りの盛んな所で、天明年間（一七八一～一七八八年）の家老、境形右衛門が領主の意を体し、領内の商業振興策として盆踊りを大いに奨励した



メイン会場の御幸公園、櫓の周辺は踊り手と観光客であふれかえった



古い街並みに若いパワーもはじける

ので、ますます盛んになり、武士をはじめ町の者が夜を徹して躍ったとされている。

平成二十年、前年の秋に初めて就任した黒石商工会議所・北山肇会頭は、「黒石よされに櫓を建て、祭りを盛り上げたい」と専務である私に告げた。黒石よされの実行委員会会長は、例年、商工会議所会頭が務めることになっていた。

黒石よされの総会が開かれ、櫓建設が発表されると、たちまち波紋を呼んだ。櫓建設はじつに十五年ぶりのことである。「この経済状況下では時期尚早ではないか」「資金が集まらなかった場合

どうするのか」「役員全員の意見を聞かないで強引すぎはしないか……」などの声に対し、北山会頭は関係者にこう叱咤激励した。

「このような経済状況下だからこそ、櫓を建てて黒石よされを本来の姿に戻し、黒石が元氣であることを内外に示そうじゃないか！」

そうして八月、木造の三層からなる堂々たる櫓が御幸公園の中央に完成した。祭り当夜は、櫓の復活の効果もあり、続々と踊り手が集結し、公園を出発。流し踊りをしながら市内コースを一周して、再び押しよされる大波のように公園会場に帰ってきた光景は、まさに豪華絢爛。かつての隆盛を知る古老は、涙を流して喜んでいた。

この年、流し踊りに参加した踊り手

は四千五百人、観光客の入れ込み数は前年を二万人上回る約十万人と発表された。

翌二十一年も櫓は建設され、踊り手は四千八百人、入れ込み数はやはり二万人増の十二万人だった。最盛期の三十万人には遠く及ばないが、青森県の観光連盟の関係者から、「青森を代表する観光コンテンツになりましたね」と、お誉めの言葉をいただいた。

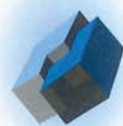
観光資源、商業活性化策として効果を期待

今年も寄付集めの時期がやってきた。今年の踊り手の参加人数は、五千五百人を超えると予想されている。櫓復活が浸透して、観光客も大幅に増えるのではないかと期待している。

江戸時代、小藩が生き残るための商業政策として開催された黒石よされが、いまこの現代において観光資源として、まちの商業活性化のために活かされようとしている。

まだまだその効果は商店街や飲食店を潤すまでには至っていないのが現状ではあるが、いよいよ三年目。市民に寄付金のご協力を仰ぎ開催しているだけに、市内でご商売されている方々をはじめ市内の活性化が実感できる祭りになることができた……と願っている。

ぜひともこの夏は、「青森のへっちゃ」黒石にお越しいただき、黒石よされを踊っていただきたい。誰でも自由に（服装も自由）踊りの輪に参加できるのも、この祭りの魅力ですから。



「徳内まつり」で郷土愛を醸成 —活動を通じ地域内外の交流広がる—



山形県村山市企画財政課 主事

● 結城文俊

村山市は、平成十六年（二〇〇四年）六月、国の構造改革特区制度による「まつり交流特区」の認定を受けた。ちょうど「むらやま徳内まつり」が十周年を迎えた記念の年であった。この特区名には、まつりを核に交流を深め地域活性化に結び付けたい、という思いが込められている。

さて村山市であるが、人の横顔に似ている山形県の中央部、横顔のちょうど耳のあたりに位置する人口二万八千人の田園都市である。東を奥羽山脈、西を出羽丘陵に囲まれ、中央を県の母なる川である最上川が南北に流れる。

（最上徳内に由来する「徳内まつり」が進化

「徳内まつり」は、江戸末期に活躍した本市出身の北方探検家・最上徳内に由来する新しいまつりであるが、その起源は人と人との「交流」にあるといえる。また「市民力」「地域力」「若者力」など、地域の活性化に必要とされる、さまざまなチカラが相乗的な効果を発揮し、今や山形県を代表するまつりの一つに数えられるまでになった。

最上徳内は、長崎オランダ商館医だったシーボルト博士から「十八世紀で最も卓越する日本の探検家」と評された人物であり、本市では郷土の偉人として地域づくりの核の一つに位置づけていた。

そのような中、徳内翁が北方探検の際に拠点とした北海道厚岸町と互いに訪問するなど、人の交流を重ね、平成三年には友好都市盟約に至った。

その三年後、かつての「村山まつり」に、厚岸町で古くから伝わる港まつりのお囃子、獅子舞などを招へいした。それを見た本市の青年たちが、このお囃子をもとに、踊りを創作し、さらに大型の山車を加えるなど、のちの「徳内まつり」につながる基礎を形成していった。まさに歴史上の人の交流がもたらした祭りの始まりである。

（身近な地域資源である「バラ・そば・徳内」を活かす

身近な地域資源は、掘り起こしによりその価値に気づき、再発見され「地域の宝」になっていく。その「地域の宝」を、さまざまな角度から肉付け

するなど「まつり化」することで、より魅力が高まり、情報発信力を増すことが可能になる。

本市には、「東沢バラ公園」という東日本一の規模を誇る公園がある。六月の一定期間を「バラまつり」として設定し、さまざまなイベントを開催することで、魅力を高めると同時に情報発信力が格段にアップし、集客を得ることが可能となる。

そばに関しても同様である。村山市は、全国で初めて、市内のそば店をネットワーク化し、「（最上川三難所）そば街道」と名付けたが、新そばの季節である十一月を「そばまつり」月間とし、その「そば街道」各店で、キャンペーンを行うなどにより、集客力のアップにつながっている。

「徳内まつり」は、徳内ゆかりの厚岸町から直伝されたということに敬意を込め、「徳内ばやし」と名づけられたお囃子を基調とし、団体ごとに創作した振り付けの踊り、そして山車を有することを中心とする。まつりは、毎年八月二十日前後の週末三日間開催されており、各団体が市の中心市街地を練り歩く形態をとっている。

当初は、徳内ばやしの団体は三団体のみであったが、十五年を経た現在、二十六団体（市内二十二団体、市外四団体）を数えるまでに成長している。各団体では新たな踊りの振り付けに取り組み、独自のお囃子を創作したりと、新たな文化の創造も行われている。山車も、当初はトラックの荷台を改造したものだったが、現在は手引きの本格的な山車へと進化してきている。

（まつりの持つ「交流力」を活用

「徳内まつり」の特徴の一つは、市内の小学校



若者たちの笑顔がまぶしいまつりパレード本番



特設ステージでも演舞が披露される



練習で地域内交流が促進

後、永続的な発展振興を図るため、「創作のまつり」から「伝統のまつり」へとどう脱皮を図っていくかが大きな課題といえる。

本市では、定住人口がなかなか増えない中、交流人口の増大により、地域の活性化に結びつけようとしている。そのため「まつり」の持つ効用①まつりの集客力による交流人口の拡大、②まつり練習等を通じた地域内コミュニケーションの促進と人的ネットワークの形成、③まつりを通して生き生きしているというイメージアップ形成など）に大いに着目し、交流創造都市実現を推進しようとしている。徳内まつりは、できてから十五年が経過し、新たなステージを迎えようとしているが、今

区を単位とする地域コミュニティの全地域から、少なくとも一つの団体が組織され、活動している点である。各団体は、地域住民から物心両面で支えられ、これに応え地域活動に積極的に参加するなど地域に根差した団体として、地域活性化の一翼を担う存在になっている。

練習や寄付集めなどを通して地域内の交流が進まれ、コミュニケーションが図られる。地域間の切磋琢磨と協調がこのまつりを成長させたといっても過言ではない。地域を基本とすることにより、地域活動やボランティアへの参加をも促し、

近年薄れつつある世代間の交流や青少年の健全育成などへの関心も高まりつつあり、地域コミュニティの再生や強化に大いに貢献している。

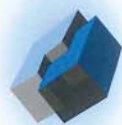
もう一つの特徴として、市内の二つの高校（村山農業高校、楯岡高校）が加入していることが挙げられる。この高校には市外からの通学者が多いが、高校時代に地域と一体となった活動を行うことで、地域への帰属意識や愛着を育むきっかけになっており、後継者の育成にもつながっている。さらには年間を通じた活動により、市のまつりイベントや友好都市等との交流事業はもちろん、

百回ほど県内や県外各地のイベントなどへ公演を行い、「徳内まつり」の紹介や観光PRなども積極的に行っている。

「徳内まつり」という祭り文化を媒体として、地域内の交流のみならず地域間の交流も生まれ、市民の郷土愛や誇りの醸成によるアイデンティティーの確立と、地域の活性化に結びついている。

「交流創造都市」の実現を推進

本市では、定住人口がなかなか増えない中、交流人口の増大により、地域の活性化に結びつけようとしている。そのため「まつり」の持つ効



廃田畑を復元、新旧住民が交流

—45年ぶりに復活した「むしおくり」—

ジャーナリスト ● 城 茂樹

気のあった友達と、伝統行事^レを楽しむながら地域の活性化につなげよう。五穀豊饒を願って行われる祭りは全国各地にあまたあるが、この祭りは伝統継承の中にも新しさがある。自分たちが楽しみながら、急激に変わりつつある社会や環境に対応しようというものだ。

房総半島の太平洋に面した海岸線、九十九里浜。この風光明媚な海岸のほぼ真ん中にある千葉県山武郡九十九里町。有名な九十九里浜のお陰で名前こそ日本全国に知れ渡っているが、人口わずか一万八千人のどかな町だ。今ではヘルシーブームもあって高級魚となってしまうた庶民魚のチャンピオン「いわし」でも有名な町である。

収穫前に行く伝統的な害虫駆除

この町の北西部の田中地区で、団塊世代を中心に有志グループが廃れていた伝統行事「むしおくり」を再現し、町の活性化を図ろうとしているというので訪ねてみた。

「むしおくり」は、納棺士を描き米アカデミー

賞を受賞した映画やベストセラー小説「おくりびと」の影響もあって、「おくり」ブームに便乗し、付けた祭りかと思ったが、そうではなかった。

害虫とはいえ焼き殺し命を奪うわけだから、安らかにあの世に送ってやろう、という庶民心情を吐露、祭りが行われていた当初から付けられた名称だ。こちらの方が「おくり」の元祖とも言える。

「むしおくり」は、この九十九里地方で農業のない昭和三十年代までは、どこの集落でも行われていた伝統行事だ。毎年七月末、収穫前の稲穂や麦穂などの農産物に集まる害虫を、麦わらや竹笹で作った松明の明かりでおびき寄せ、焼き殺す豊作祈願の駆除作業のことだ。

農業や農業技術の発達で徐々に廃れていたが、これを町の振興に役立て、次世代に伝えていこうと九十九里町の田中地区で平成十七年に再生させた。四十五年ぶりの復活という。

復活の理由は三つある。まず自分達が楽しむこと。次いで廃田・廃畑の有効活用、それに新旧住民の交流だ。

団塊世代の住民らが先導役に

復活させたのは町当局ではなく、飲み仲間^レの集団「田中交遊倶楽部・自然塾」のメンバーだった。大塚徳郎さん（66）を会長にサラリーマン、自営業、建築士、陶芸家など十二人がそれぞれの持ち味を生かし、手弁当^レで参加しているが、専業農家はいない。生粋の地元出身者と、他地域から引越してきた人がほぼ半数だ。

どの祭りも同じだろうが、祭りの本番は一年のうちのわずか数日だが、そのための準備は一年がかりで行われる。「むしおくり」も同様だ。

簡単に言えば、中央部に高さ十五メートルの大やぐら一基と周りに二、三メートルの小やぐらを一基設置、それに三十数本の松明、これらに火をつけ害虫をおびきだし焼き殺す。祭りのフィナーレはこの大やぐらが燃え尽きるまでのわずか三十分足らずだが、準備は麦わら作りから行われる。祭りに使う材料は全部メンバーの手作りだ。

九十九里町でも少子・高齢化が進んでいる。町全体が地元出身者の旧住民と、引越してきた新住民とが混在しており、この間の交流はほとんどなかった。田中地区では、昭和三十年代までは約三十戸の専業農家がコメ、麦、サツマイモ、落花生などを作っていたが、今ではそれがわずか三戸に減った。「農業では食えない」と去っていった。他方、自然環境の良さから流入した同地区の新住民の戸数は五十五戸に増えている。

その田中地区では、農地だった「田んぼ」や「畑」は耕作放棄地となり荒廃。あちこちで通りすがりの車から空き缶などが捨てられ、ゴミ捨て場と化



「むしおくり」で大やぐらに火が着けられる



地区の子どもたちも参加



再生した土地で作った麦を収穫

そして祭り本番。今年の「むしおくり」七月三十一日に催される予定。新旧住民の子どもたちもたいまつに火をつけ、大人と一緒に夏の夜の祭りを楽しむことだろう。

していた。町の景観上も良くない。メンバーは「この荒地をなんとか利用できないのか」と知恵を絞り、所有者の同意を得て荒廃した農地の整備・復元に取り組んでいる。その活動が功を奏し、甦った農地が増えてきた。その広さは既に東京ドームより広い。

この土地で麦を作った。麦の実の部分で饅頭やうどんを作り格安で販売する。わらは「むしおくり」の時のやぐらや松明に利用する。畑の一部にはひまわりやキンセンカ、コスモス、アイスランドピーなどの花畑を作った。

祭りの復興のもう一つの狙いは、ほとんど交流のない旧住民と新住民の交流の場にしようとする

ものだ。町の活性化は旧住民と新住民が一体にならなければなかなかできない。

（楽）しみながらの大やぐら作り

さて、祭りの主役は大やぐらだ。これを作るのは難しい。「田中交遊倶楽部・自然塾」副会長の田中邦彦さん（65）が中心になって全員野球で楽しみながら作っているが、一週間以上はかかる。でき上がった大やぐらは、威風堂々といった表現がピッタリで、燃やすには惜しいほどだ。

同倶楽部の広報担当、中村勝雄さん（59）によると、まず支柱となる十八メートル級の四本の竹を選定し、切り出す。全体はもちろん、節の間隔

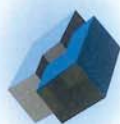
も同じような長さの竹を選ぶのが、バランスを保つために重要だ。

この四本を一・二メートルの正方形の頂点四カ所を地下一・三メートル掘り、地中に埋め込む。この竹に麦わらを張っていくのだが、重要なのは上下同じ大きさの直方体にしないことだ。

ちょうど古代ギリシャやローマの神殿の柱に見られるエンタシスように、真ん中部分をわずかにふくらませ、上を細くする。「こうしなければ威風堂々にならない」と中村さんは言う。

燃やすには惜しいほど手が込んでいるが、仲間が楽しみながら作っていく。作業は難しいけれど楽しいほど挑戦のしがいがある。大やぐらの頂上には見栄えを良く

し点火しやすくするため、二・五メートルの茅の木を取り付けて完成だ。



伝統芸能の存在が集落の絆に —過疎地域では新たな祭りづくりも—



NPO法人佐渡芸能伝承機構 事務局

● 松田幸子

（芸能が継承された祭りは
佐渡に百二十もある）

「祭り」というと何を思いうかべるだろうか。大学生など若い人に聞くと「夜店・花火」という答えが多く聞かれる。佐渡でも、夜店や花火の行われる祭りは幾つか数えることができる。しかし、そのようなイベントの側面を持つ祭りとは違った祭りが、佐渡の集落では行われている。

佐渡島は平成十六年、十市町村が合併し佐渡市となった。平成二十二年五月現在の人口は六万四千三百二十人。集落で芸能が継承されている祭りは約百二十もある。このため、祭りと言え



ば芸能と
思ってい
る佐渡人
が大多数

だろう。

佐渡の祭りに付随する芸能の特徴は、ほとんどが「門付け芸」である。集落内の各家を回り、芸を披露し、迎える家では酒や料理を振る舞うというものだ。

芸能を継承し集落を回るということは、集落に住む人々を結びつけコミュニティの維持に寄与していると考えられる。また、芸を継承し祭りを執り行うということは、稽古や準備を通して皆が集まる機会ができるということでもある。

過疎化・高齢化から人手不足に悩む集落も多いが、「芸能があることで二歳の幼児から八十歳のお年寄りまで人の集まる場ができる。集落の核となる」との思いから、継承・存続の道を探している集落もある。

（過疎化・高齢化進む集落で
新たな祭りつくる試みも）

また、そのような機能に着目し、新たな祭りを作っていかうとしている集落もある。関という集落がそうである。過疎化の進む佐渡の中でも高齢

化率の高い外海府地区にある関集落は、戸数約三十戸、高齢化率四二％。学校統廃合などの波を真っ先にかぶるような地域である。

そのような関集落で、そこに住む人たちがどのような思いで新たな試みを行っていったかを、ここで紹介させていただく。

関の祭りは、毎年旧暦の九月十五日に行われる。以前は鎮守である三宮神社での神事のみであった。その祭りに二年前から太鼓の音が聞こえるようになった。

言い出したのは関集落の四十歳代の二人の住民である。子どものころは、他集落の祭りに呼ばれていくと、集落を挙げてのにぎわいをうらやましく思っていたそうだ。

そんな二人が島外から関に戻ってきて、過疎や高齢化の問題を抱えた集落の今後を話していた時に、よその祭りに呼ばれていた時のことを思い出し、「そのにぎわいをつくれなにか」と思案し、太鼓を核に新たなことができないか、という考えに至った。

周囲の助けもあり（財）自治総合センターのコミュニティ支援事業（宝くじ）を利用し、平成二十年に太鼓が関に届いたのは、祭り開催の十日前のこと。その年は神社での奉納と集落の人へのお披露目だけだったが、翌年の平成二十一年には各家を回る念願の門付けを果たす。

関集落の若手だけでは手が足りないため、関の民宿の常連である東京・八王子市から来られている方々が飛び入り参加。さらに、私も佐渡芸能伝承機構が、国交省の「新たな公」によるコミュニティ創生モデル事業で祭りを通じた学生と集



雨の中、各家を回り門付け芸を披露



飛入りで太鼓をたたく人たちも

落との交流事業を行ったご縁で、新潟大学の森下修次准教授の協力を得て、同大学教育学部の学生たちが祭りに参加した。

一昨年、私どもに、「祭りで太鼓を打つにあたって、どのような太鼓をたたけばいいか」という相談があった。その際、集落からの要望はただ一つ。「誰でもたたける太鼓を」とのことだった。

雨天の中ずぶ濡れで 集落を回り太鼓打つ

それは、太鼓を通して多くの人を巻き込み、皆が元気になるという、前を向いた気持ちの表れであった。そして、その気持ちは形をなしている。前述した佐渡島外の応援ももちろんだが、

集落内でも年配の女性が飛び入りでたたいたり、保育園の子どもが一日ついてまわり耳で覚え、立派に太鼓をたたいたりもした。

初めて太鼓を迎える集落の人たちは戸惑うこともあったようだが、若い人たちの試みを温かく迎えてくれた。祭り当日はあいにくの雨だったが、門付けに雨天中止の選択肢はない。ずぶ濡れになりながらも一日かけて集落をまわったことが周囲の理解を得たのだと思う。

また、太鼓が好きでたたきたくて、最後までついてまわった子どもたちには、以前の神事だけの祭りとは違い「関の祭り」は確実に自分たちの祭りという思いを抱かせた。

一昨年、昨年と祭りを終えて、関集落の方にかがうと、「一つのことを成し遂げたことが大きな自信となった」と言っていた。

今年の二月には関集落を含む外海府地区の文化祭にも出向いて太鼓を打ってきた。関集落だけではなく、請われれば他の集落にも出向いて行くし、太鼓以外でも手伝うことがあれば協力をすると言っていた。

「開かれた太鼓」ゆえに 周囲を巻き込める

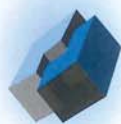
「誰でもたたける太鼓」は、新たな動きを巻き起こす可能性を感じさせる。祭りや芸能を存続・継承していく道筋は一つではない。

関集落で新しく始めたことだが、集落内だけではなく今後の展開が困難なことを見越して、周囲を巻き込む「開かれた太鼓」にしたことが成功につながっていると思う。

また、私どものNPOでは、この二年間、国土交通省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業の選定を受け、大学生が集落の祭りに「集落の若い衆」として準備・稽古を含めた参加をする活動を行ってきた。

他者を巻き込んで集落機能を維持する方法を選択する場合、行政機関をはじめとした連携が重要となってくる、と考えられる。そして他者を巻き込むためには、まず自分たちが楽しんで継続できることが一番大切なのではないだろうか。

佐渡では関集落だけではなく、地域を何とかしようとする新たな動きが出てきている。私どもも各方面と連携をとり、協力できればと思っています。どうぞ佐渡の祭りにお越し下さい。



市民総参加の祭りづくり

―年々拡大する街をあげた「挑戦」―



財団法人につぼんと真ん中祭り文化財団 専務理事

● 水野孝一

につぼんと真ん中祭りとは？

「につぼんと真ん中祭り（略称…どまつり）」は、市民の自主的な発想から生まれ、年齢、性別及び地域を問わず誰もが参加でき、音楽や踊り等で地域文化を表現する真夏の名古屋最大の踊りの祭典である。毎年八月末ごろ、愛知県名古屋市を中心に二十数カ所で開催する。「観客動員ゼロ」全員参加」をコンセプトに掲げ、市民総参加の祭りを目指す。

誕生のきっかけは、一九九六年夏、名古屋の大学生たちが北海道のYOSAKOIソーラン祭りに参加したことである。彼らは北海道での体験に感銘を受け、「名古屋に踊りで感動を伝えられるような祭りをつくりたい、この感動を名古屋から発信したい」と願い、一九九九年二月、大学生による「につぼんと真ん中祭り実行委員会」を設立。同年八月には、千五百人の踊り手の参加と、三万人の来場者を集め、第一回の祭りが開催された。その後、行政・企業・メディア・地域社会に幅

広く働きかけ、祭りの規模は年々拡大している。二〇〇九年の第十一回祭りでは、名古屋市を中心として県内各地で開催し、二万三千人の踊り手の参加、二百九万人の来場者を記録。祭りの開催による効果は、「まちづくりや観光交流都市づくりへの貢献」「世代を超えた県民の交流と活力の増進」「広範なコミュニティ組織の育成」など、多方面により影響を与えてきた。

につぼんと真ん中祭りの 独創的なルール

どまつりは「鳴子」を持ち踊る、いわゆる「よさこい」形式の祭りである。本場、高知県の「よさこい祭り」はよさこい節を取り入れた曲に合わせて踊る。北海道の「YOSAKOIソーラン祭り」はソーラン節を取り入れた曲に合わせて踊る。しかし、「につぼんと真ん中祭り」は名古屋の民謡に合わせて踊るわけではない。どまつりのルールは、「踊る楽曲の中に地元の民謡を取り入れる」ことである。

ここで指す「地元」とは、参加チームの「地元」

であり、愛知・名古屋を指すのではない。どまつりで最も尊重することは、それぞれの地元らしさを表現することである。ちなみに、踊りの審査項目に「どまつり性」というものがある。地元の個性を踊りや曲で表現することを「どまつり性」と呼んでいる。オリジナルの作品を作るにあたって、ブロードウェイのミュージカルを参考にしたり、リオのカーニバルを参考にしたり、あらゆるエンターテインメントを参考にする。

しかし、それらを真似する限り、それらを超える作品を作ることはできないだろう。究極の個性、オリジナル性は、実はすぐそばの足元（地元）にある。どまつりでは、徹底的に地元をこだわることを推奨している。どまつりチームの踊りは、まさに多種多様である。韓国からのチームは「アリラン」を。サイパンからのチームは「チャモロダンス」を。愛知・名古屋といった特定の地域の伝統文化を押しつけないことで、祭りの可能性は無限に広がった。

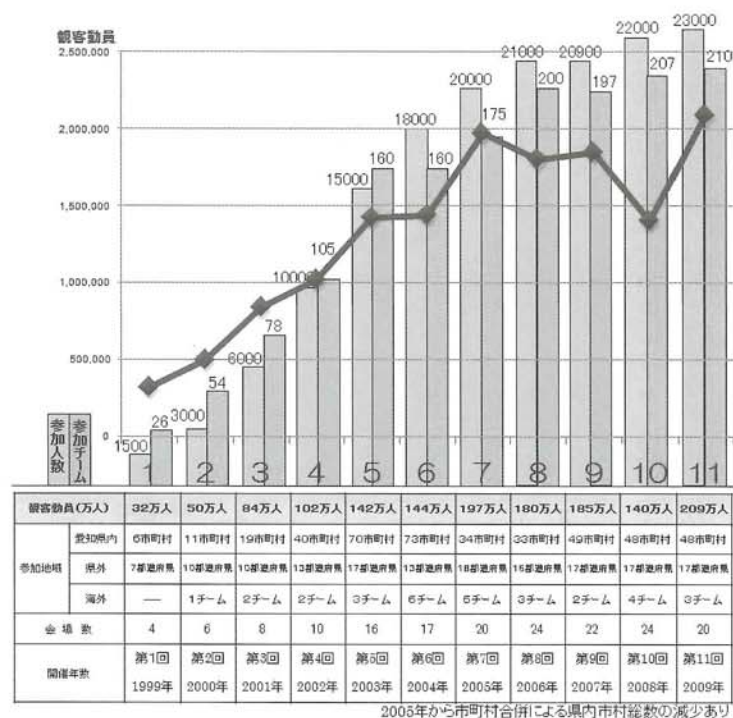
につぼんと真ん中祭りが 目指す「市民総参加」

・市民総参加による財団の設立
祭りの主催組織は、事業の成長と共に進化している。設立当初は地元大学生による「実行委員会」が祭りを主催していたが、二〇〇七年には財団法人化を果たした。任意団体の場合、財産は個人所有であったり、一切の契約行為は個人が行ったりと、個人に係る負担は極めて高い。

事業の公益性が高まり、継続や発展が望まれる一方で、個人では背負いきれない部分が多く出てきたことが法人化の背景である。



参加者・観客動員グラフ



子どもから大人まで市民総参加の祭り
©につぼんど真ん中祭り

財団法人といっても、特定の行政や企業等が出捐しているわけではない。設立時の基本財産を含む全ての財産は、広く市民の寄付による。

公益法人を取り巻く環境が変化する中、当時の財団法人の設立は非常にハードルが高く、特に形のない「祭り」や「祭りの開催効果」を財産と認めることは全国でも例がなく、極めて珍しいケースであった。財団法人は「財産」をもって構成するが、我々が当時八年かけて築いてきた財産は、民意で形成し、成長してきた「祭り」そのものである。この組織体には人格を付与することは、我々にとって非常に大きな意味がある。この取り組みは、「市民総参加」による財団の設立であるといつても過言ではない。

・祭りの裏方も参加者の一員

事業規模が拡大した現在においても、祭りの企画・運営の中心は地元の大学生が担うスタイルに変わりはない。大学生は約一千万円の寄付を募り、メインステージを企画、運営する。

メインステージを除く各会場は、地元商店街や町内会、PTAといったそれぞれの地元が主催する。資金集めから警察・消防等の行政手続き、広報、運営まで全てを地元が担う。全会場の裏方(ボランティア)総人数は約七千人に及ぶ。これも、どまつりが考える「祭りへの参加」の一つである。

・地元全員参加を目指すチームづくり

どまつりが考えるチームとは、地域を代表するチームである。甲子園での高校野球をイメージしていただくと分かりやすい。地元は地元高校を誇りとして様々なサポートをする。地元高校は街を代表し、街のためにも勝つ努力をする。そして一勝すると、街が沸く。どまつりが目指すチームの姿は、まさに「チー

ム

どまつりでは、これらの考え方を「五十年構想」として定めているので、ここで紹介する。

《につぼんど真ん中祭り五十年構想》

1. につぼんど真ん中祭りは、それぞれの地域文化に誇りの持てるコミュニティづくりを推進する。
2. につぼんど真ん中祭りは、人類共有の世界文化を目指す。
3. につぼんど真ん中祭りは、世界の地域文化が集い、誰もが創る全員参加型の祭りを目指す。

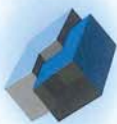
「全員参加の祭りづくり」が、人と地域の活性化、文化の継承と創造につながるものと確信する。「全員参加」には上述のとおり、行政、企業、メディア等、すべてのセクターの参画が必要である。既存の枠組みではとうてい成し得ないことで、これらの取り組みは、街をあげて取り組む「挑戦」でもある。真夏の名古屋へご来訪いただければ、誠に幸いである。

ムの活躍」が「地域の活躍」となることである。

どまつりも同様である。ステージ上では約千人の踊り手が華麗に力強く踊りを披露するが、踊り手は氷山の一角でしかない。行政は広報・回覧板で活動を告知したり、地元小学校では体育の授業や運動会でチームの踊りに取り組んだり、町内会、商店街、ひいては踊り手の家族に至るまで地域を挙げてチームの活動を支援する。

氷山の水面下には非常に深く、立体的に地元がチームを支えているのである。踊り手も、踊り手以外のサポーターも、氷山全てがどまつりの参加者なのである。

結びに



「宝来栄」が38年ぶりに復活

—昔の音頭テープ見つけたり再現へ活動—



尾鷲市議会議員
尾鷲神社氏子総代

● 三鬼和昭

「紀州の奇祭」と呼ばれるヤーヤ祭（正式には尾鷲神社祭礼）は、二月初めに尾鷲市の街中で行われる、江戸時代に生まれた伝統行事である。戦国時代の武士の名乗りである「ヤーヤー我こそは」に由来すると言われ、白装束の男達が「チョウサジャ」の掛け声で練る（ぶつかり合う）祭りだ。

祭りの日程は二月一〜五日で、練りは二月二〜四日の夜に行われ、五日は尾鷲神社での大祭のあと、午後から旧熊野街道を三つの袴務町が繰り出す大名行列や、それをにぎわす道中手踊りの一行が宮上りを行い、沿道の見物客を楽しませる。

この道中行列の中には、袴人・潮撫で・弓射といった神事や祭事の主役を中心に、弓持ちなどの子役に混じり、歌舞伎の弁慶の如く勇ましい子役が道中で長刀を振る舞い、披露する。いわゆる「縁起もの」として、人々から自宅前での舞を望まれると、その周囲には大きな人だかりができる。

ヤーヤ祭は大いににぎわった昭和四十年代をピークに若者の都会への流出や遊びの形態が変わり、その風情は失われつつある。平成の時代とな

り、神社の氏子からなる二十町（旧町）の町頭を中心とした祭りの改革や、集客事業として行政の支援なども受け、現在に至っている。

（7年ごとに奉納）
ヤーヤ祭に山車を出し、

その二十町に属する六十世帯にも満たない私の住む新町では、いつの時代からか定かではないが「宝来栄」と呼ばれ、女形（男子が花魁風の姿）が山車の上で彩（采）を両手にかざして舞う。

この宝来栄は、尾鷲神社祭禮では新町祭神である須佐之男命の守護神である不動明王が入る御幣（尾鷲神社正殿前にある）を奉納する儀式で、二十年ごとの遷宮時に新町はこの御幣を奉納している。

四十年ほど前までは、ヤーヤ祭に山車を出し、道中行列の先頭に立ち清めの舞を行っていたが、およそ七年ごとに御幣の奉納を行っていたようだが、子役のなり手が少ないことや大きくは財政的な事情から行っておらず、現在に至っている。その間に多くを知る古老もいなくなり、また、山車なども傷みがひどく処分されてしまっていた。

この「宝来栄」については、かなり以前に当時の音声（伊勢音頭の流れを汲む地元を唄った大漁音頭のテープ）がみつかった。それをデジタル化して複製されたことから、町の役員たちに舞などの復活を考えるものが現れた。

同時に、当時を知る人たちからもその願いが日増しにつり、山崎章司氏を会長に、そして日高俊一氏を実行委員長として祭りに関わる役員たちと「新町宝来栄復活保存会」が組織され、具体的な活動が始まった。

大漁音頭は音声があることから町の役員が練習することで決まったのだが、問題は舞であった。

しかし、この「宝来栄」とよく似た舞が市内の八幡神社（十五町）にも過去にはあったようで、自ら子役として務めたことのある川原町出身の湯浅康史氏（66）に舞の振付け指導をお願いし、彩（采）振りの子役も見つけたり、数カ月の練習に励んでもらった。

（2年をかけた復活劇に
多くの激励と賛辞）

その間、次の問題は山車の製作だった。唄や踊りの復活については、伝統芸能など文化として支援をいただいたが、山車の製作には当時、市にあった「まちづくり補助金」の支援を願ったが理解されず、町内外の人たちのご厚意や地元自治会の支援、そして製作にたずさわる者の理解を得て、ようやく形にできた。

子役についても、衣装や化粧などは、市内で日本舞踊教室を営む坂東流柳蛙会（坂東伊三栄会主）のご厚意で立派なものとなり、顔見世、本番と彩（采）振り役を務めた子役の艶やかな舞は、人々

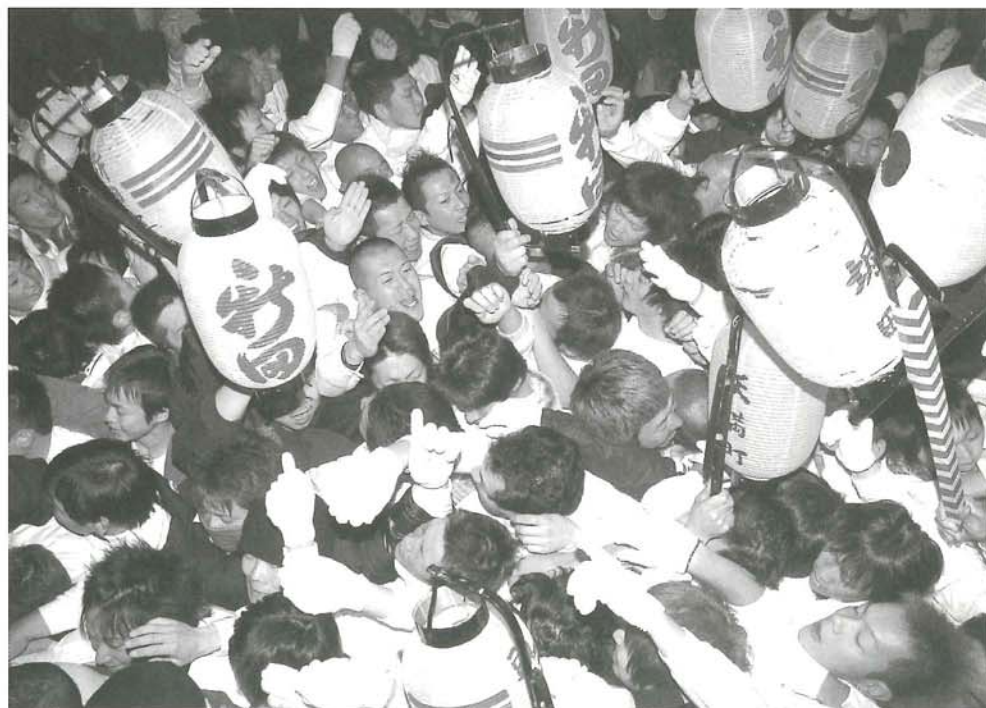


宝来栄で子役が艶やかな舞を見せる（熊野街道での宮上りの様子）



クライマックス。尾鷲神社での奉納と見守る氏子たち

を魅了させ堪能させた。
約二年間かけた復活劇は、意見の対立や意思疎通の悪さから紆余曲折の連続だったが、それでも復活にかかる日高実行委員長らの意気込みは日増しに高まり、わずか十数名での活動であったが、多くの励ましや声援をいただき、実に三十八年ぶりの「宝来栄」の復活となった。



東紀州の奇祭といわれるヤーヤ祭での勇壮な練り

本番より数日前に行った顔見世でも、驚くほど多くの人から激励と賛辞をいただいた。特にヤーヤ祭の五日目の宮上りにおける行列では、これまでに以上の見物客を集め、メディアの取材もあり、市のPRにも大きく貢献した。
それとともに、地元住民にふるさとの原風景を見ていただき、「癒し」あるいは「感動」として、心に残ったのではないかと思う。

尾鷲を離れた人々が帰る 故郷の祭りとして保存

もちろん、この復活劇を行った者たちも、支援していただいた方たちも、そして、見物していただいた方たちも、皆がノスタルジーな絆で結ばれたことは言うまでもない。

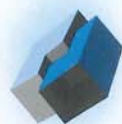
この宝来栄は、七年に一度しか行わない。このため、その時の祭りの活性は期待ができるものの、

子役（采振り役）の確保や指導者の育成、また、唄い手（大漁音頭など大敷漁などで唄い、受け継がれたと考えられる）や囃子手などの確保が次なる課題である。

宝来栄のあらゆる所作が現在の生活にマッチするものでないことから、一番には後継していく指導者の育成が大事だろうと考えている。

古き良き時代には、祭りの開催となると町同士が競い合い、それが町の活力となっていたことだろう。過疎が進む地方では、せめて地元の祭りの時くらいには帰郷するとか、尾鷲を離れて生まれた二世や三世の皆さんも「ふるさとの祭りにしたい！」と思うような、ヤーヤ祭になればと思う。

そんな中で、こうした絆が広がるよう、新町という小さな町ながら、次の出番まで「宝来栄」を保存することが、私たちの務めであると考えている。



歴史資源の掘起しで地域再生

―自治会結成40周年を機に夏祭り復活―



長岡京市 柴の里自治会 会長

● 山方久蔵

低調だった地域活動を 盛り上げた歴史ロマン

長岡京市は、京都府の南西部に位置し、人口八万人の小都市である。約千二百年前、桓武天皇が平城京から平安京へ遷都される間の約十年間、都があったと遺跡発掘などで証明されている。いわば「まぼろしの都」として語り継がれていた、ロマンの街だ。

西は、天下分け目の戦いで有名な天王山を有する西山連山、東は京都市内へと視野が開ける。近年では街の中央を二本の鉄道が走りJR大阪駅まで三十分、京都駅まで十五分、阪急電鉄では大阪梅田駅まで三十五分、京都河原町まで十五分と交通至便の地で、大阪、京都など大都市のベッドタウンとして栄えている。

柴の里地域は緑豊かな田園地帯であった。昭和三十〜四十年代の日本経済の高度成長期に長岡京市の人口は急増。昭和四十三年当時、長岡町今里の一部だった柴の里地区は宅地造成工事で誕生した。

地名は工事を手掛けた会社の頭文字「柴」と、今里の「里」に由来する。自治会組織の結成もこの年である。そのため神社仏閣や古来の地域の伝統、風習がなく新住民の絆も希薄であった。昭和六十三年の京都国体を機に自治会活動も活発になったが、今日では他の地域と同様、住民の高齢化に伴い地域活動も低調になっていた。

平成二十年は柴の里誕生、自治会結成四十周年の佳節の年であった。これを地域再生のチャンスと決意したのである。

鴻臚館のあった地名が 千二百年も伝承されてきた

鴻臚館こうらくは、外国の使節団や賓客を接待した役所で、今から千二百年余り前に平城京の難波鴻臚館が、長岡京に移設され、十年後の平安京に移る間、長岡京鴻臚館として柴の里にあった、と口伝えられている。

この地で先祖代々居住し、農作業に従事してきた複数の古老の話を聞くと、昔から「こうら」は口伝として語り継がれてきた。京都新聞社発行の

「乙訓山城の伝説」に鴻臚館があったとの伝説が記述されている。また、長岡京市教育委員会発行の「長岡京の語り部」にも柴の里に鴻臚館があった、との伝説の存在が記載されている。

地域の歴史や伝統に乏しい新興住宅地に住む私たちは、自治会結成四十周年を記念して長岡京迎賓館想定地という歴史的資源を掘り起こすことにした。「京都府地域力再生プロジェクト」の支援を受けて「鴻臚館」再現を町おこしのきっかけとした。町のルーツをしのび住民が誇りとする町づくりのために、長岡京鴻臚館を顕彰する碑文モニュメントを建設し、「鴻臚の郷祭」として夏祭りを再生させた。

「鴻臚の郷祭」として 柴の里の夏祭りを再生

柴の里の夏祭りは、昭和五十一年に酒樽に提灯を巻きつけた「樽みこし」を作って町内を練り回ったのが始まり。このスタイルは平成五年まで続けられた。当時

は子どもたちも沢山いて、「樽みこし」も夏祭りを彩り盛り上



再生した夏祭りを大人も子どもも楽しむ



「鴻臚の郷祭」に集った子どもたち

げるのにそれなりの成果を上げた。

形が普遍的でオリジナリティーに欠けることから、平成五年の自治会結成二十五周年を機に、みこしの形態を大きく変えた。

「新みこし」製作に当たったコンセプトは、提灯を単に装飾ではなく地域の細胞組織とし、自治会を支える「班」の顔として住民の結集と団結、

連帯をシンボライズし、飾り付けした。夏祭りの催事から「神輿」をイメージしたが、宗教的な神輿ではなく夏祭りにマッチした演出用の「みこし」とした。平成七年には「囃子方座車」を加え、独創的な「提灯み

こし」の巡行スタイルとした。

「提灯みこし」や「囃子方座車」は、山田静人氏が柴の里地域の子どもたちに「ふるさと文化」の創造を永く伝承してほしいとの思いで、個人技で手作りし寄贈してくれた。

そして平成二十年、今までの夏祭りを一新した第一回「鴻臚の郷祭」を二日間、開催した。一日目は長岡京市長や市議会議長、教育長など多くの来賓を招いてモニメントの除幕式や将棋、お手玉など子どもたちと大人の昔の遊び、スイカ割り、前夜祭として映画の上映も開催した。屋台の店も大人たちや子どもたちの楽しみの一つであった。

二日目は子どもたちと住民、総勢二百人でみこしの巡行、青年部による威勢のいいみこしの練りこみ、夕闇が迫るころは「お年寄り」とこどもたちの合唱、「フィナーレ」は「盆踊り」で大きく盛り上がり、多くの住民とともに、夏の夜を楽しんだ。この時から地域住民も「こうろ」への関心の高まりを強く感じた。

第一回鴻臚の郷祭の参加者数は約六百人、第二回は七百人の参加者があった。今年八月には、第三回鴻臚の郷祭を挙げる。地元の菓子店も千二百年前のもてなしを今に甦らせる銘菓として、長岡京市特産の筍を甘露煮にしてあしらった和菓子「鴻臚の郷」の発売を始めた。

住民の絆が強まり 地域活動が活発化

柴の里自治会は三百六十六世帯で、このうち七十歳以上の高齢者が二百十六人の高齢化社会だが、元気で生き生きと地域活動に取り組んでいる。この年には多彩な行事を行った。五月には、長

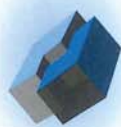
岡京市長や市議会議長ら多くの来賓を迎え記念式典を行い、「紅白の花ミズキの植樹」や祝賀会を行った（参加者八十人）。十月の「市民運動会」は校区で第三位だった。十一月は「芸能バライティー」を行った日本舞踊や詩吟、謡曲、カラオケなど多彩な芸を披露した。

また「鴻臚の郷に育む作品展」と称して文化祭を開催。絵画や切り絵、彫刻など多くの作品が展示され住民の趣味の高さに驚いた。地域に住み、縁を結ぶ人々が悠久のロマンをしのび、誇りをもって明るく闊達に地域活動に励んでいる。この祭りを機に、自治会に青年部を結成した。若者と年寄りがしっかりとした絆で、元気で明るいまちづくりをめざして活動している。

翌年二月の大寒の時期には、東南海地震（震度7）が発生し、西山活断層がさく裂した——との想定で、住民百五十人が参加した防災訓練を行った。十歳から七十歳までの十五人が氷点下の温度のテントの中で、昼夜を過ごす耐寒訓練を行い、睡眠状態などデータ取りを始め、炊き出し訓練、給水訓練など真に迫るものであった。

また子ども会、年輪クラブ、青年部、コアふれまち等で構成するシネマ委員会を結成して、毎月一回シネマ館（自治会館）で映画を上映し、老若男女のふれ合いの場となっている。

柴の里自治会は、二十周年、三十周年の節目、節目を契機として発展してきた。この歴史を鉄道に例えるなら、「柴の里銀河鉄道」はいま四十周年と言う駅に着き、新たなエネルギーとして「鴻臚の郷祭」や青年部の人材と深い絆を満載して、次の駅を目指し永遠の都へと出発した。



住民の手で農村歌舞伎を復活

―過疎・高齢化の葛畑区でまちづくり―



養父市政策監理部企画政策課 主査

● 安達洋道

兵庫県北西部に位置する養父市。その北西部に歌舞伎舞台を有する葛畑区がある。戸数は四十七世帯、百二十六人が住んでおり、少子高齢化や過疎化が進んでいる区である。しかし、葛畑区には国、県、市指定の文化財が十三もあり、文化財の宝庫なのである。区の組織に「文化部」という部署を設け、文化財の保存を継続して行っている。

昭和四十三年に国の重要有形民俗文化財に指定された葛畑の舞台（芝居堂）は間口八間、奥行き八間の入母屋茅葺き民家型の舞台で、上手にかみ下座（太夫座）があり、開演時は左に花道が付設され、全国でも現存数の少ない独廻式歌舞伎舞台である。花道・廻転・二重・下座・セリ引き・遠見・ガンドウといった演劇学的舞台機能を有し、田楽返し・スッポン・ブドウ棚・奈落などの舞台機構・装置も備えた数少ない農村歌舞伎の施設だ。

江戸末期から活発だった 葛畑の農村歌舞伎

葛畑での歌舞伎興行については、明治三十九年発刊の「七美郡誌」によると、安政五年九月二十

八日に氏子神社の祭礼にて「百姓の鎧着て出る祭りかな」「幾年も地狂言ある祭りかな」という発句が残っている。江戸末期から明治にかけて葛畑で農村歌舞伎の活動が盛況だったことを物語る。

その当時、歌舞伎舞台での公演は、お盆や秋祭りに行われ、昭和九年ごろまで盛んだった。それが、社会情勢の影響で一時衰退した。その後、舞台が指定文化財になるということで、昭和三十九年、四十一年に復活公演が行われたものの、その後、娯楽の多様化やテレビの普及などで、長らく途絶えていた。

その当時、役者などで関わった村の若者も現在では老人となり、葛畑区の過疎化・高齢化が進む中で、平成十二年ごろから「もう一度、葛畑で歌舞伎を！」という機運が高まった。そこで、葛畑芝居堂改修工事を関宮町（当時）に要望。平成十四年から工事を開始するとともに、葛畑区民五十人名が一致団結し、平成十五年には葛畑の芝居堂で復活公演が行われた。

明治初期、葛畑座の座長だった藤田甚左衛門は、

大阪の芝居小屋で歌舞伎役者をしたあと帰郷し、地域の農民に歌舞伎を教え公演を行っていた。

葛畑農村歌舞伎は上方歌舞伎の影響を受けており、昔に倣い上方歌舞伎を継承する演出家に指導を仰ぎ、伝承活動がスタートした。

「復活の機会は今しかない」と 中堅世代が立ちあがる

兵庫県下では舞台を保存し、その地域の成人男性のみで公演を行うところがなく、貴重な存在であり、「まずは大人が復活させる」「その次に子どもへ継承する」という思いを持っていた。次世代へ継承する雰囲気や住民が持つことが大事だと考えていた。

区の中堅世代が中心となって、農村歌舞伎を実施しようという盛り上がりを見せ、三十七年前の復活公演で上演した経験者と協力し、「今しか復活の機会がない」という危機感をもって行った。

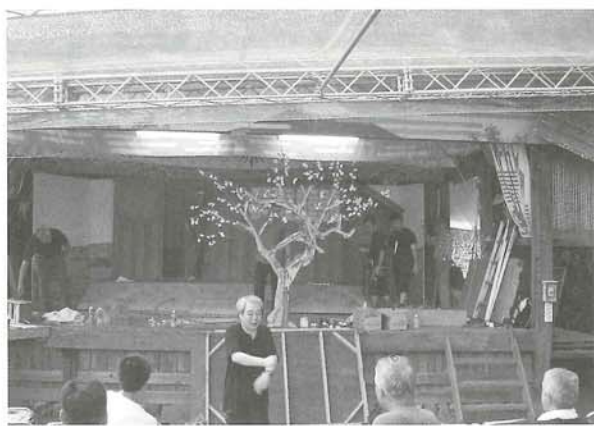
歌舞伎復活には、役者の養成とともに舞台機構の操作ができる人材の養成も必要であり、舞台機構伝承者養成講座などを実施し、区を挙げて取り組む体制を整えた。

葛畑座が西宮市の兵庫県芸術文化センターで公演した後、全国から支援を得るため、平成十九年に「葛畑農村歌舞伎伝承友の会」を立ち上げ、会員を募集しており、現在会員数は百五十人である。このような活動が評価され平成十八年度、ふるさとづくり賞振興奨励賞・ふるさと文化賞受賞、十九年度に知事功労章受賞（兵庫県）、二十年度に過疎地域自立活性化優良事例として総務大臣表彰を受賞するまでに至った。

活動実績を紹介すると、以下のとおりである。



満員御礼の客席



公演前の舞台設営



せきのみや子ども歌舞伎

農村の小集落ではあるが、子どもから大人までが関わるこの地域でしかできないオンラインワンの地域づくりを目指し、今後も継続的に活動を行う予定である。

このような大人の活動を見ていた地域の子どもたちも「やってみたい」と思うようになり葛畑区の子どもたちが中心となり、旧関宮町全域から小学生が集まり、せきのみや子ども歌舞伎を結成した。子ども歌舞伎は平成十五年から毎年公演を

秋に行う子ども歌舞伎は 養父市の風物詩に

▽平成十五年、「葛畑三番叟」「絵本太功記十段目尼崎閑居の場」(葛畑芝居堂 三回公演延べ一千人來場)▽平成十六年「葛畑三番叟」「新版歌祭文 野崎村 久作住処の場」(葛畑芝居堂 三回公演延べ一千人來場)▽平成十七年、北播磨交流の祭典 農村歌舞伎祭「新版歌祭文 野崎村 久作住処の場」(初の外部公演)▽平成十八年兵庫県立芸術文化センター「葛畑三番叟」「新版歌祭文 野崎村 久作住処の場」を公演(八百四十人來場)

行っており、毎回春に養父市内から公募し、秋に公演するという流れで行っている。

この農村歌舞伎は年々成長し、平成二十年には茨城県で行われた国民文化祭に、兵庫県代表として出演し、好評価を得るまでに至っている。秋に行うせきのみや子ども歌舞伎公演は養父市の風物詩となっており、毎年、京阪神地域からも多くの方が來場している。

また小中学生が中心となるせきのみや子ども歌舞伎は毎年、新しい演目に挑戦し、公演を行い、毎年八百人の観客を集めている。

葛畑区は高齢者率が四〇%を超え、地域の活力が低下していたが、地区内にある重要文化財「葛畑の舞台(芝居堂)」を保存し、葛畑農村歌舞伎の活動を続けることで、区の存在を市内外に広めることができ、都市部からの來場者も増えている。高齢化が進み、マンパワーが足りない小集落では、活動を継続する上で困難なことが多く、区民が総力を挙げ、地域ぐるみの活動を行うことにより、区

の活性化と一体化を図ることができた。

農村である葛畑の良さを知ってもらうことは、地域の誇りであり、住民の元氣とエネルギーを醸成することにもつながっている。

後世に継承するための人材育成も

そして、農村歌舞伎を後世に継承するため、平成十五年から小中学生が中心となる「せきのみや子ども歌舞伎」の演技指導、公演支援を行い、将来に向けた人材の育成を行っている。

また、地元の関宮小学校では、総合的な学習の時間で歌舞伎体験活動や関宮中学校では義太夫三味線を音楽の時間に体験するなど地域の学習素材にもなっている。

葛畑の芝居堂での公演にとどまらず、市内外での公演など今後も活動の幅を広げていくこととしている。また、葛畑の区内の地縁活動を基盤としつつも、新たな時代にふさわしい組織づくりが今後の課題となっている。

今後は、來村者に農村歌舞伎の体験や衣裳体験、地域の農作物を加工した特産品販売、またこの地域でしか体験できない土人形作りなど地域の活性化へ向けた活動も展開する予定である。



祭り文化の再生と
地域活性化

9

鳥取県鳥取市

日本の祭り めざし市民祭り改変 ―傘踊りを採り入れ「しんしゃん祭」に―

「因幡の傘踊り」を改作し
老若男女が踊れる祭りに大衆化

昭和三十六年、商工業の振興を目的にスタートした鳥取祭は、市中パレードが中心であった。その結果、市民が参加する機会が少なく、全体に盛り上がり欠ける祭りであった。

そこで、関係者が知恵を絞って、これより前の昭和二十七年三月に無形文化財に選定された「因幡の傘踊り」を改作して、老若男女が気軽に、楽しく踊れるよう、大衆化することを考えた。

昭和三十九年の鳥取市庁舎新築落成を記念し、現在の「きなんせ節」の振り付けで、新作傘踊りが発表された。これを機に、祭りの名称を公募し、「しんしゃん祭」と決まった。そして、昭和四十年に「第一回鳥取しんしゃん祭」が開催され、この踊りが取り入れられた。

「しんしゃん」とは、市街地の温泉で「湯がしんしゃん沸く」と「鈴の音がしんしゃん鳴る」という意味で名付けられた。

昭和四十一年、歌手の三波春夫が歌った新曲の

鳥取市観光協会 ● 鷲見宣幸

「しんしゃん傘踊り」の発表が鳥取市役所で行われ、その後、昭和四十四年にこの曲の振り付けが完成し、「第六回鳥取しんしゃん祭」から登場することとなった。平成に入り、何曲か登場したが、現在では、「平成鳥取音頭」「しんしゃんしんぐりら」の二曲が創作踊りとして踊られている。

市民納涼花火大会を
しんしゃん祭りの前夜祭に

一方、昭和二十九年八月十五日から、日本海新聞社（現・新日本海新聞社）が主催となり、千代河原市民交流スポーツ広場では、「市民納涼花火大会」が行われていた。

この市民納涼花火大会を「鳥取しんしゃん祭」の前夜祭とし、八月十六日を「本祭り」として行われるようになった。ちなみに八月十六日は、当時、気象統計上からみて、「最も降雨確率の少ない日」ということもあった。

しかし、第二十五回では、「鳥取世界おもちゃ博覧会」と連携するなど、何度か日程を変更する

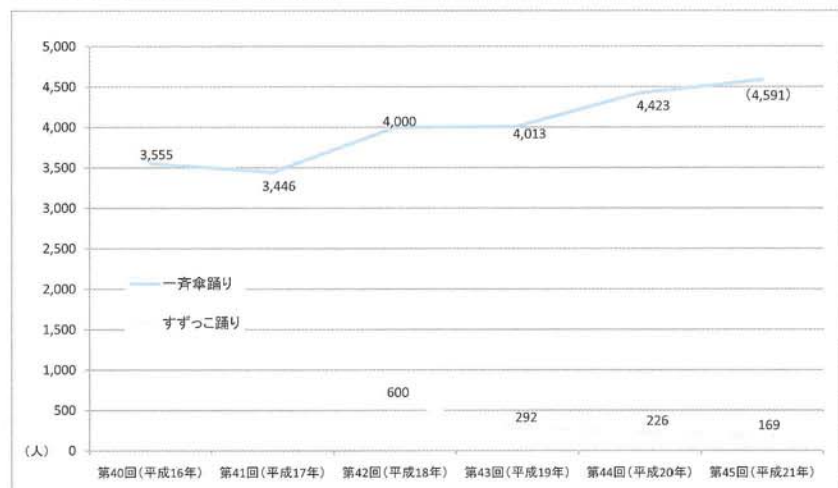
こともあった。

鳥取市は、「鳥取しんしゃん祭」を有名にして、日本の祭りに名を連ねるようにするために、県外へのイベントには、積極的に派遣し、「しんしゃん傘踊り」を踊ってきた。

毎年「姫路お城まつり」「岩国まつり」には、二十数名を派遣するほか、年十回程度は県外で「しんしゃん傘踊り」を踊っている。

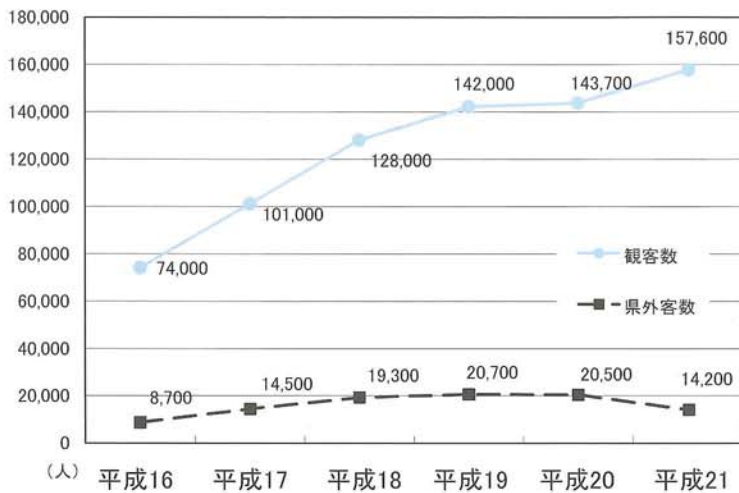
また、今年一月に東京ドームで開催された「ふさと祭り東京」では、約百人の踊り子を派遣した。このように「鳥取しんしゃん祭」の名前はだんだんと知れ渡ってきている。

しんしゃん祭参加者数の推移





観客数および県外客数の推移



参加者も増えている「一斉傘踊り」



参加者の増加が急務な「すずっこ踊り」

一斉傘踊りの参加者数は平成18年以降、増加傾向

一斉傘踊りの参加者数は、こうした努力の甲斐あって、平成十八年以降増加している。

この要因として挙げられるのは、一斉傘踊りの実施日が、八月第二土曜日に変更になったため参加しやすくなったことと、一つの連の人数の上限を撤廃し、人数の多い連が参加するようになったこと、などである。これは、平成十八年度から試行した内容であり、参加数の増加に対して効果があったと考えられる。

その中で、平成二十年の大幅増加により、初めての試みとして、平成二十一年は一斉傘踊りの日にちを二日間に分けたため、参加者はさらに増加

した。しかしながら、二日目は雨天中止となった。(平成二十一年の参加者数のグラフの数字のみ、二日間の合計予定人数を表している。)

また、同じく平成十八年度からの試行として実施している「すずっこ踊り」については、参加する連ならびに人数が年々減少しており、祭りの実施以前に、踊りの普及による参加連の増加が急務であると考えられる。

観客数は、一斉傘踊りが一日のみの開催であったにも関わらず過去最高値となった。また、県外客数の割合は、平成十六年が低く、十七、二十年までは一四・一五%で推移し、二十一年は大きく下がった。これに伴い、県外客数の推計も二十一年は大きく低下している。

また、平成十六、二十年までは、実施日が盆休み(例年十一、十二日、十六日ころ)の期間に重

なっていたが、二十一年はこの期間から外れてしまったことから、帰省客の数が少なく、結果として県外客の数字が下がったと推察される。

今年はいしゃんしゅん祭の運営を民間業者に委託

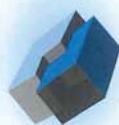
一斉傘踊りでは毎年、「渋滞」という大きな問題を抱える。一斉に踊り始めると、一カ所でも間隔が開けば後ろはたちまち渋滞につながる。

平成十八年以降、踊りのコース変更し、開始時間の二部制、二日間に分けるなど、さまざまな工夫を凝らしているが、未だに解決策は出てこない。

第四十六回となる今年も、初めて一斉傘踊りを含めた「鳥取しゃんしゃん祭」全体の運営を民間業者に委託することとしている。

今年の「一斉傘踊り」は、従来の八月十六日に戻る。さまざまな問題をひとつずつ解決していき、

参加者の満足感、運営側の達成感が得られれば、そこで初めて、日本の祭りとなり、自然と県外の観光客も増加していく要因になるのではないか、と考えている。



商工会の努力で住民参加の行事に ―復活した伝統の「仁尾八朔人形まつり」―



三豊市商工会 ● 三宅靖夫

領主を偲び四百年以上 続いていた風習

三豊市仁尾町は香川県西部、荘内半島の付け根に位置し、一方が瀬戸内海・燧灘に面し、三方は山に囲まれた、面積十五平方キロあまりの小さな町である。歴史は非常に古く、貝塚跡があり平安時代は京都・賀茂神社の荘園として都との往来が始まり、沖にある鳶島が西風を防ぐ役割をし、港町として栄えてきた。

戦国時代に細川頼弘公が当地に居城をかまえたころから、急速に発展したといわれている。江戸時代は丸亀藩から酒や醤油、酢などの醸造が特に許され、また土佐藩の参勤交代の発着場になった関係から土佐茶を扱うようになるなど経済的に恵まれ、商家が立ち並び、京阪神や福山、尾道などとも交易を結び大いに発展した。京阪神から職人と呼ばれる人形作りも盛んに行われていた。

歌人や力士なども抱えた商家もあり、文化も花開いていた。商店名を示す『○○屋』などの屋号が多くあり現在も屋号で呼びあう。また繁栄を示す神社・寺院も多く点在する。

八朔とは、旧暦八月一日のこと

西讃地方（香川県の西部）では、男子が生まれた家では新米を使った団子馬を作り飾る風習があるが、それは崇徳上皇が政争に敗れ讃岐に流された時に、都を思う上皇のために地元の姥が団子で馬を作った慰めとか、丸亀藩の曲垣平九郎の故事にちなんだもの――など諸説ある。いずれにしろ昔、馬はとても貴重なものであったのだろう。

仁尾での八朔の祝い方は、少し異なった趣がある。一五七九年（天正七年）、土佐長曾我部元親の侵攻を受け仁尾城は落城したが、その日はちょうど三月三日であった。以後、領主を偲んで八朔の男子の節句に女子の雛人形も一緒に飾る風習が四百年以上続いている。

こういった時代背景があり、昭和四十年頃までは男子が生まれると、子供の健やかな成長を祈り、八朔人形を作り舞台を設けて近所に披露し、訪ねてきたお客には料理などを振る舞ってきた。

しかし費用も手間もかかり、近年の住宅事情の変化もあり、この風習も時代の移り変わりとともに廃れ、平成に入ってからは何年かに一度くらい見かけるのみとなった。

商工会が取り組んだ ふるさと情報発信事業

仁尾も時代の流れとともに模造真珠製造が盛んな時代、塩田が盛んな時代、みかんで潤った時代、太陽熱発電の実験地になった時代、雨乞い竜を目玉に観光に力を入れた時代など変遷を重ねてきた。

こうした中で、商工会では平成九年、「ふるさと情報発信事業」を行い、仁尾の歴史や文化などを紹介したビデオを作成した。そこでも近年まれになった八朔人形飾りを紹介した。

街並みは貴重なものがあり、この八朔人形飾りを活かした街づくりができないかと検討した。以前のように、町に何ヶ所も八朔人形飾りが行われれば集客も図れ、にぎわいが復活できれば地域の活性化につながるのでは、との声も上がった。

商工会では商店街活性化対策としての思いがあり、町内の各方面に呼びかけて委員会を設置、平成十年十一店舗に依頼し、舞台飾りを行った。

飾り方は箱庭風（横幅四〇五センチ、奥行三二センチ）のジオラマをつくり、歴史上の名場面を主体に現在はおとぎ話の場面も取り入れ、雛人形も同時に飾っている。また、スタンブラリーのコースを商店街（街並み）に設けて、「仁尾八朔人形まつり」

を九月十九日～二十一日の三日間、開催した。

舞台飾り一つでも約十日間にわたる店舗の借用、人形や砂・竹・苔など自然の草木の用意、背



舞台飾りを見学する来場者



人形工房内での打ち合わせの様子



人形飾りの展示場面

景画の製作など多くの工程がある。祭りを盛り上げるため旧家も借用し、商工会女性部がお茶の接待を行った。またスタンプリ―完走者には、商工会員の協賛を得ておしりを贈呈した。

イベントには売店がつきものだが、最初はそこまでの余裕はなかった。その後、実行委員会内で商工会役員全員により各専門部会を構成し、運営してきた。人形飾りの準備物の手配、ボランティア募集、幟立て、ポスター・ちらしや無料バスの手配などそれぞれの役割を担ってきた。

回を重ねるにつれ 町ぐるみのイベントに

回を重ねるごとに、参加者に人形作りを体験し

てもらおうと人形工房の設置、産学連携を図るために電波高専との共同製作、地元中学生の参画、寺院の協力、小学生による寺院の白壁に壁画製作、幼稚園、保育所などが参加、団子馬製作教室、人形展示委託者募集など次第にまちぐるみのイベントになっていった。

売店も地元の海産物、人形、地元につながる郷土料理の販売など、仁尾をアピールする効果が出てきている。通りにも小さな店を出す傾向が見られ、人形飾りを通じて他町との交流も行っている。

このまつりが第七回ふるさとイベント大賞最高賞（総務大臣表彰）を受賞できたのも、地域住民を挙げて祭りが評価されたものである。こうした

経緯を経て、仁尾八朔人形まつりはイベントとして復活。今年も九月十八・二十日（土・月）の三日間、開催される。

課題は後継者の育成と 住民参加の広がり

現在、仁尾町商工会は合併したため、事業は実行委員会組織として行っている。今後、より地域ぐるみのイベントとしていくには住民参加が必要である。人形飾りをしていくには人も高齢化しているため、後継者の育成も急務である。

イベント期間は三日間だが、歴史の変遷により育まれてきた仁尾の街並みは他町の方から見れば魅力的なものがあ、先人から受け継いだ財産である。最近、費用のかからない事業『まちあるき観光事業』で、仁尾を歩く人も増えている。

イベントの継続とともに、古い建物や街並みの保存にも努めていく必要がある。他町では、かつての豪商の屋敷を再生し、

観光の拠点として年間を通じて事業を行っているところもある。仁尾もそのような核を作り、集客ができるしくみづくりが必要だと考えている。



合併後も丹原の独自性残し復興

―旧西条市関係者の協力得て御輿楽車を奉納―

みこしだんじり

西条市丹原上町御輿楽車代表 ● 一色忠政

〔初代松山藩主が設けた
市場の一つ旧丹原町〕

平成十六年十一月一日、西条市・東予市・丹原町・小松町二市二町が合併し、新生・西条市が生まれた。丹原の由来は、江戸時代に新たに商業地として整備された町が、元は砂礫の原野（赤い土地）であったところに由来する。丹原の「丹」は赤いという意味である。

松山藩初代藩主、松平定行公が領内に三つの市場を設けたうちの一つが、丹原である。農村にある商家を廃して地区に集め、商業町を計画的に創設したもので、一六六四年から一六六七年にかけて、長さ四町、奥行き六十間の新しい在町づくりが行われた。

近年、今治・小松自動車道の東予・丹原インターチェンジが設置され、主要地方道である壬生川・丹原線沿いにさまざまな店舗が立ち並び、にぎわっている。しかし、少子・高齢化、地域産業の衰退、郊外大型店舗等の変化に伴い、旧丹原町の中心である商業地域（上町・下町）は退勢してい

るのが現状である。

〔「西条まつり」との違い〕

全国的にも有名な「西条まつり」は、市町村合併以前の市域（旧西条市）にある、四つの神社の祭礼の総称である。旧東予市・旧丹原町・旧小松町で行われている祭礼でも、旧西条市域と同様の「だんじり」楽車、御輿、太鼓台が奉納され、年々規模も大きく盛んになっているが、「西条まつり」としてではなく、あくまでもそれぞれの地域の祭礼とされ、現在でもいわゆる「西条まつり」とは別の祭りである。

〔人手不足や老朽化で途絶えた御輿〕

幼少時、青年団（現在は無い）が運行していた上町の「御輿」が昭和四十年ころ、人手不足や老朽化で途絶え、祭りはあっても商店街を運行するものがなくなってしまった。

そこで、昭和五十年ころ、丹原上町商店街の有志八人で子供太鼓台を手作りし、商店街を子供と

共に運行していたが、小学生の数が減少し、上町子供太鼓台を自治会が管理することとなった。上町の商店街役員の協力を得ながら、愛護班、丹原小学校上町のPTA役員が主になり、子供たちと運行した。

当時、丹原地区には、池田（白金団地）・今井・下町で楽車を運行し、下町・上町・久妙寺・願連寺では子供太鼓台を運行。また今井には子供御輿、池田には子供獅子舞があり、十月十六日、丹原小学校グラウンドで統一行動を行っていた。

だが子供の減少に伴い、祭りの反省会で「大人が運行するのなら、出身者が帰ってこれるようなものにしよう」「以前あったような御輿にすれば大人が運行できるのでは？」といった話が出るようになった。

問題となったのは、運行に参加できる上町の人数である。下町は人数も多く、楽車、子供太鼓台の二台を運行できるが、上町では困難ということになり、「上町御輿楽車ができたら子供太鼓台は運行しない」ということで話はまとまった（小学校PTAの方には先頭の綱を引くことにより、今まで通り参加できることを説明）。



昭和40年ころまでの御輿と若者たち



子供太鼓台



上町を運行する復興した御輿楽車

にぎやかな商店街を練り歩いていた御輿楽車こそ地域活性力のシンボルということで、有志ではなく、自治会の手で復活する話がまとまり、役員二十五人で運営委員会を立ち上げた。

昔、青年団が運行していた御輿の白黒写真が上町集会所にあり、それを見た西条の人たちが「是非ともこの御輿を復興しよう」と、機運が高まった。西条市と合併したことで、旧西条市の御輿関係者の協力を得ながら、西条の御輿の部品（車・夫婦房）を分けてもらい、着々と準備を進めていたが、委員から「自分たちで幕を作成するのは無理」とのこと、しばらく休みとなった。

太鼓台から御輿楽車へ

旧西条市の御輿の関係で相談していた人から、「土居町の太鼓台が売りに出ている。太鼓台その

ままでは幅が広く運行できないが、御輿に改造すれば運行できる」との話を聞き、入札して購入した。

復興は、昔のものをというところで、西条流や新居浜流に画一するこのないよう、丹原上町の独自性を大切に復興した。旧西条市の楽車大工の棟梁や鉄工所、刺繍刺の協力を得て、数枚の古写真を元に、御輿楽車として復興した。

平成二十年四月、旧西条市の御輿とは形も違うが、幼少時の記憶にしかなかった念願の御輿楽車が完成した。当時歌っていた伊勢音頭や囃子は、古老に聞き「文化」を伝えている。

丹原地区のうち、下町・上町では四月第三日曜日に地元の恵比寿神社の春祭り、十月十五、十六日には、氏神福岡八幡宮に奉納の秋祭りがある。太鼓・締め太鼓・鐘は、旧西条市の御輿とは多少異なるが、以前青年団で運行していたものを伝承し、そのまま続けている。

春祭りは、下町の楽車・子供太鼓台（以前上町

で運行していたのと同様のもの）、上町の御輿楽車と恵比寿神社の神輿が出て、丹原商店街を中心に、上町・下町の北裏・南裏など全域運行している。

上町御輿楽車には近年、香川県・新居浜市・旧西条

市の各方面から、当日地元の祭りがなかったため、応援に来てくれ、また子供太鼓台の時にはなかった横笛の音もあり、盛大な祭りとなっている。

上町御輿楽車が復興してからは、秋祭りの十五日夜には、丹原公民館前で、今井楽車・下町楽車・池田（白金団地）楽車・丹原地区ではないが、田野楽車・旧東予市の久枝御輿・上町御輿楽車・下町子供太鼓台・願連寺子供太鼓台が集い、蠟燭提灯に灯を灯し、かき比べを行っている。

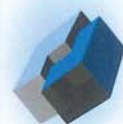
宮出し・宮入り

上町子供太鼓台運行の時は、秋祭りの十六日の朝、宮出しには行っていたが、宮入りは蠟燭提灯もなく、時間的に暗くなるということもあり、行っていなかった。

現在、宮出しは、今井・下町・池田（白金団地）の楽車、下町・久妙寺・願連寺の子供太鼓台、上町の御輿楽車で行っているが、宮入りをしているのは、今井楽車・下町楽車・上町御輿楽車の三台である。子供の祭りが中心となっていた丹原の祭りが、大人を主体とした祭りに変化してきた。また、神社の宮出し、宮入りも以前より厳格化されてきている。

祭り当日は人数が少ないながら、どうにか運行しているが、準備・片付け・補修などには人が集まらないのが現状である。上町に四十年余り大人の楽車が存在しなかったのが、皆の祭りに対する思い入れが希薄だった背景といえる。

復興はできたが、これからはそれを存続させていくための人材を育てることが重要な課題となっている。



高齢化で途絶えた祭りを復活

—木浦鉾山地区を離れた若者たちが継承—

木浦すみつけ祭り保存会 会員

佐藤栄伸

大分県の南端にある佐伯市宇目木浦鉾山地区では、四百年以上前から銀や錫を中心とした鉾石の産出が行われていた。かつては山間奥地の狭小な地形にもかかわらず映画館やパチンコ店、遊郭までも立ち並び、地名どおり鉾山で賑わいを見せた村であった。

しかし、昭和十九年の錫鉾業整備令により錫の産出が廃止され、終戦と同時に休山となった。その後、昭和四十二年に日本で唯一といわれるエメリー鉾が産出されるようになったが、需要の変化から平成二十一年に再び休山となった。

二年に一度だけ 過疎地が賑わう瞬間

こうした歴史を持つ木浦鉾山も鉾業がなくなっただけでは、世帯数三十七戸、人口五十八人、高齢化率九五%以上の寂れた集落である。筆者が小学校に入学した三十年前でも、同級生はたったの一人という超僻地だったが、ついに筆者を含めすべての若者は地区を離れて生活している。

しかし、鉾業のない木浦鉾山がかつての鉾山ら

しい賑わいを見せる瞬間が二年に一度だけある。それが「木浦すみつけ祭り」である。

それは厄払いを目的とした祭りであり、大根に付けた炭を参加者全員がお互いの顔に塗り合い、荒神が区内全戸に舞い込むという、全国的にも珍しいものである。祭りの起源は諸説あるが、最も物語らしさがあるのが、次のような説だ。

「ある鉾夫がその日は鉾山には入らず、嫁と釜戸のススを塗り合ったりして遊んでいた。するとちやうどその日に落盤事故があり、坑道にいた全ての鉾夫が死亡し、遊んでいた鉾夫だけが生き残った。それ以来、鉾山に入山する前の日に、お互いの顔に誰かれ構わず炭を塗り合い、無病息災を祈願するようになった。」

祭りの別名は「山上がり祭り」とも言われ、まさに鉾業で発展した木浦鉾山を今に語り継ぐための、象徴的な伝統文化である。

平成十七年二月に開催されたすみつけ祭りの際、地区外に住む私たちは、祭のスタッフとして、祭当日だけ参加した。これまで地区在住のお年寄

りだけで行ってきた、案内看板の設置や駐車場の確保、来場者へのもてなしなどを手伝った。祭が終わると、お年寄りたちは「よく頑張ってくれた。次も頼むよ」と、荒神舞をした私たちを労った。

しかし、平成十八年末に行われた木浦鉾山地区総会で、木浦すみつけ祭りは、中止されることが決まった。「高齢化」がその理由だった。

それから約半年が経過し、これまで一緒に荒神舞をしていた同僚から「このまま伝統ある木浦鉾山の文化を途絶えさせていいのだろうか。地元のお年寄りたちをもう一度やる気にさせることはできないだろうか」と相談があった。

その時、木浦鉾山の区民は祭りを「やりたくないから」ではなく、「できないから」しなのだから、ということを変更して知らされた。

お年寄りとの協議しながら 祭りの「原点回復」を目指す

その後、今まで祭に携わっていた若者計五人で集まり、木浦鉾山区の方々に祭りを継承しなければならぬという使命感が欠落していたことを詫言、「どうにかわれわれの手で祭りを実施させてもらえないか」と交渉した。その結果、「祭の再開を若者に任せると」の結論をいただき、平成二十年二月の祭りの実行が決定された。

今回の祭りでは「原点回復」をコンセプトに置いた。これまでの祭りは、百人を超える地区外の方々に案内状を出し、それらを来賓として境内で料理を振る舞いながら接待し、いかに多くの観客を引き込み、木浦鉾山で楽しんでもらえるかを目的に行われてきた。それが、高齢化した地区民の力では賄えなくなっているのだ。



炭の付いた笑顔のお年寄りたち



今はのどかな山村の木浦鉦山地区

しからば、祭りの本質を見出し、必要最低限の労力で賄えるような内容とし、「いかに地元の人々が楽しめる祭りにするか」に主眼を置いたのだ。ところが、このコンセプトに地元の人々の一部が「せっかく山奥まで来てもらうのに、来賓に賄いもなしでは失礼だ」と異を唱えた。

それなら、いたずらに来賓を増やさず、日ごろから木浦鉦山区が本当にお世話になっている方を来賓として案内し、最低限の接待をする——ということで折り合いが付いた。その他にも、これまでの祭りの内容を踏襲しようとする意見があったが、「若者に一度は任せると言っただけだから」という区長の意見に助けられ、「元祖木浦すみつけ祭り」を企画することになった。

進めることができた。しかし、問題は祭りの本質に関するノウハウである。これまで、「イベント要員」として参加しただけだったので、その勝手については先輩に教えられながら進めた。

そして祭り当日。今まで全ての裏方作業が整った舞台に「荒神」として舞い上がり、先導役の地元区民に引きつられながら各戸を回っていた時とは訳が違う。全てのスケジュール管理、資材配備、スタッフの配置を数少ない若手でこなさなければならぬ。

祭りの実行に当たり、最も問題なのが交通の便であった。地区までのアクセス道は、県道ではあるが離合もままならない獣道で、駐車場は廃校になった小学校の校庭しかない。

このため、今回の祭り再開を決定してからの数カ月間、観客が殺到しないようにと「限界集落の消えた奇祭復活」といったマスコミ報道は極力控えてもらうようお願いしたのであるが、既に多くの反響があり、当日の交通渋滞は予想された。

多くの不安要素を抱えながらも、祭りは無事終了した。来場者数はかつてないほどの推定千人、神社境内から人があふれそうになったが大きな混乱もなく、交

通渋滞も迂回路を活用するなどして、不安事項は全てクリアできた。

そして、若者たちを最も喜ばせたのは、お年寄りたちが祭りを運営するのではなく、祭りに参加し、炭の着いた真の笑顔を見せてくれたこと。さらに地区に縁のある多くの方々がたった一日の祭りのために、遠くは関東からも帰省してくれたことだった。

繁栄した鉦山で生を受けた 同胞が再会する唯一の場

この祭りは、木浦鉦山区が鉦山で繁栄したことを広く知らしめる祭りであると同時に、その繁栄によって生を受けたわれわれ同胞が、二年に一度再会する唯一の場なのである。

平成二十二年二月。二年に一回の祭りがまた開催された。前回と比べれば事前の反響は少なく、来場者数は推定七百人程度にとどまったが、収容能力を考慮すれば、ちょうど良い規模だった。

私たちは、祭りの意義を問われれば、木浦鉦山区の方々にそこで居住していることの誇りを持つてもらいたいこと、そして木浦鉦山区を離れていった方々にそこ生誕した者としての自覚を持つてもらいたいこと、などであると認識している。

われわれ若者にも限界はいつか訪れる。しかし、木浦鉦山区民の無病息災を祈願する祭りである以上、木浦鉦山区民の最後の一人を送り出すまでは続けたい、と考えている。

最後に、祭りの実行に関しては大分県、佐伯市などの行政機関、佐伯市観光協会、さらに近隣地区住民の皆さまなど多くの方々のご支援、ご協力を得て開催できていることに感謝申し上げます。

祭りの経済的価値を測定した伊多波・八木(二〇〇九)から、リピーターを増やすためには、祭りの訪問客の印象をよりよくすることが効果的であることが明らかにされた。

また、財団法人・地域伝統芸能活用センター(二〇〇三)からは、祭りを単体で展開するのではなく、地元の伝統芸能や近隣の祭りとの関係を考慮しながら、これらを有機的にプロデュースすることも強調されている。

訪問客に好印象を与えるためには、インフラ整備など行政の果たす役割が重要になってくる。他の地域の祭りとの有機的関係のプロデュースにおいても行政の果たす役割は大きい。

さらには、祭りの調査研究においては行政の支援策は欠かすことができない。こういった状況は、祭りを地域政策の一環として捉えることの必要性を示している。

祭りの効果として、経済波及効果が強調される傾向が強い。しかし、今後、各地で祭りが地域活性化策と展開されるならば、地域間の競争が激しくなることが予想される。また、大都市でも、東京マラソンなどのようなイベントを開催するようになっていく。

大都市におけるこのようなイベントは地方の祭りと競合する可能性がある。地域間競争に勝ち抜くためにも、祭りを地域政策と位置付けて効果的に祭りを運営していくことが必要である。この際、政策担当者は専門的な分析能力・知識を持つていなければならない。そうでなければ、厳しい競争に打ち勝つことは難しいであろう。

- 1 全国の祭り、民俗芸能、文化伝承を紹介している最近の文献として、佐藤・保田編(二〇〇六)、星野・芳賀監修(二〇〇六)などがある。
- 2 柴内(二〇〇六)、一四ページを参照せよ。
- 3 柴内(二〇〇六)、一九―二〇ページを参照せよ。
- 4 詳しくは、大守(二〇〇四)、九三―一〇七ページを参照せよ。
- 5 内閣府の次のサイトを参照せよ。http://www.npo-homepage.go.jp/data/index.html

〈参考文献〉

- 伊多波良雄・八木匡「ソーシャル・キャピタルとしての祭り―京都三大祭りの経済的評価を中心に―」同志社大学ライフリスク研究センター、Discussion Paper Series, No.2009-02.
- 大守隆(二〇〇四)「ソーシャル・キャピタルの経済的影響」、宮川公男・大守隆編(二〇〇四)『ソーシャル・キャピタル―現代経済社会のガバナンスの基礎―』東洋経済新報社、所収、77-122ページ。

河田潤一訳(二〇〇一)『哲学する民主主義』N.T.T出版。(Putnam, Robert D. (1993), *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, NJ: Princeton University Press).

財団法人・地域伝統芸能活用センター(二〇〇三)『平成十九年度サービス産業生産性向上支援調査地域伝統芸能・行事等の経済波及効果と集客交流拡大支援調査』。

佐藤和彦・保田博道編(二〇〇六)『祭りの事典』

東京堂出版。

柴内康文訳(二〇〇六)『孤独なボーリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。(Putnam, Robert D. (2000), *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*)

高秀賢史・高岡耕子・永井護(二〇〇四)「来訪者から見た祭りの便益に関する比較分析」日本都市計画学会、都市計画論文集、no.39, 241-246ページ。

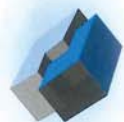
星野紘・芳賀日出男監修(二〇〇六)『日本の祭り文化事典』東京書籍。

柳田国男監修(一九七〇)『民俗学辞典』東京堂出版。

Snowball, J.D. (2005), "Art for the Masses? Justification for the Public Support of the Arts in Developing Countries - Two Arts Festivals in South Africa", *Journal of Cultural Economics*, 29, pp.107-125.

〈お詫び〉6月号の本文を一部訂正

本誌6月号の記事中、5ページ上段の本文5行目「また、施設の老朽も著しく進展している」は「全国で施設の老朽化は著しく進展している」に、6ページ中段1行目の「社会教育施設も」は「社会教育施設にも」に、6ページ下段5行目の「市民自らが追うべき」は「市民自らが負うべき」に、それぞれ訂正いたします。



祭りは地域の救世主になれるか

―地域づくりの理念と継続性が重要―

なぜ、祭りなのか

いま、全国各地で、消えてしまった祭りを復活させたり、細々と継承してきた地域固有の祭りに創意工夫を加えて活力を取り戻そうとする動きが活発化している。

ちなみに、伝統的な祭りには例外なく神事や仏事的要素が根源にある。神に奉納するという目的で演じられる神楽や舞楽などは神事芸能と言い、仏教と関連する獅子舞とか念仏踊りとかは仏事芸能と呼ばれている。

ところが、これらの芸能は時代とともに神事や仏事から離れて独立して演じられるようになり、さらに、経済や文化の発展によって芸能に新しい時代の息吹が与えられるようになると独自の芸能として洗練され、今日見るような、いわゆる伝統的な祭りの核（風流と呼ぶ）として定着するよ

うになったのである。

このように、祭りには神事や仏事としての「儀式」の面と芸能としての「遊び（宴）」といった二面性を併せもつものであり、しかも、「蘇生」、つまり、祭りを通じて新しいエネルギーを人間の体内に蓄えて、明日からの労働にいそしむという狙いがあった。

さらに、祭りは人心を、一つに束ねる、という意味の「マツル」という語源から発して「マツリ」という語に転化したという説もある。その意味において、祭りは地域共同体にとって不可欠のものであったのである。

では、こんな本源的な意味をもつ祭りが、なぜ、今日叫ばれるようになったのだろうか。

「地祭り」と呼ばれる祭りは、太平洋戦争後、間もなくまでは全国津々浦々で大変盛んであった。人々は日常の貧しい暮らしのうつぶんを祭りにぶつけて気持ちのバランスをとり地域共同体の



地域創造プロデューサー

● 二瓶長記

秩序を保っていたのだが、高度経済成長期になると若者は次々と大都会に逃げ出し、地域に残るのはお年寄りのみとなり祭りどころではなくなり、過疎化とともに祭りもまた衰退の道をたどりはじめたのが正直なところだ。

そんな社会状況は、現代も依然として変わっていない。しかしながら、信仰心の希薄化と祭り本来の精神構造も失われてしまった今、祭りの魅力をもう一度蘇えらせようと、一度消えた伝統的な祭りを復活させたり、活力を失った祭りにテコ入れをする地域も現れてきているが、なかなか思うようにいかず悶々としているのが現状である。

祭りのさまざまな効用

祭りには、さまざまな効用があるからこそ、昔から暮らしの中に根付いてきたといえる。それでは、祭りにはどんな効用があるのかを簡単に列記

してみよう。

1. 伝統文化の継承と意識の高揚に大いに役立つ
↓民族の意識づけ
2. 地域住民をよりエネルギーに集結し、コミュニティ文化の向上に役立つ↓コミュニティ社会の発展
3. 職業や年齢を越えた共通の場が生まれ、地域に連帯意識が芽生える↓連帯意識による地域づくり
4. 精神的にも荒廃している多くの人々に祭りを通じて、豊かな人間性を育むことができる↓人間としての悦び
5. 祭りは老若男女がそれぞれ一体となって催す唯一のイベントであり、エネルギーを発散できる格好の場である↓平和的エネルギー発散の場
6. レジャー志向が多様化している現代にあつて、祭りだけはいまなお全ての人々を酔わせる最大のレジャーである↓余暇利用最大のレジャー
7. 祭りはそこに住む人々の意識とコミュニティ社会の存在を、より多くの人々にアピールできる最も効果あるパブリシティ手段である↓最大のパブリシティ効果
8. 無形の観光資源として、これほど動員力を見込めるものは他に見当たらず、まさに、動員催事の王様である↓最大の動員催事
9. 地域の商業経済の繁栄に、たとえ一時的にしろ大きく寄与できるものは他にはない↓地域経済の繁栄
10. 祭りに酔えば酔うほど祭りのあとは心が空虚になる。その空虚な状態こそ新鮮なエネルギー



平成22年6月に実施された市民参加による「桶狭間古戦場祭り」の一場面

祭りの成立特性と事例

ちなみに、現存する祭りの形態を成立特性ごとに分類すると、次のようになる。

を蘇生させる母体となる↓新鮮な創造とエネルギーの源泉

*

祭りにはずっとあげただけでもこれだけの効用がある。祭りの再生や復活には、確固たる地域づくり理念のもとに祭りの効用を認識し、継続的に取り組んでいけば、祭りへの愛情も深まるとともに、効果は必ず生まれるものであることを肝に銘じて欲しい。

○文化性

地域のもつ文化的特性を主体に掘り起こしたものを祭り化したもので、①「遺跡等を誇ったもの」と、②「伝統祭事をテコ入れしたもの」に分類される。

前者の事例としては、宮崎県西都市の「古墳まつり」等で、ここでは古墳時代の人々に扮した参加者が当時の暮らしの疑似体験と古墳時代の祭りが再現される。後者の事例としては沢山あるようだが、意外と少ない。

これは伝統祭事に手を入れることをタブー視する風習が大きな原因で、祭りの伝統よりも因習に縛られているケースが多い。数少ない改革事例としては、筆者が関わった京都府宮津市の「天橋立



ダンボール製手作り甲冑で祭りに参加する子どもたち



どの地域も、こぞって挑戦する「よさこいソーラン踊り」

文殊堂出船祭」等がある。

○歴史性

地域の歴史的特性に光を当てた祭りでは、これには①「故事来歴を掘り起こしたものと」、②「偉人を賛美したもの」とに分けられる。

前者の事例として筆者が関わったものに、愛知県豊明市の「桶狭間古戦場祭り」がある。これは織田信長が今川義元を奇襲攻撃で撃ち破った故事を実際の古戦場跡で再現する祭りであり、主役の信長、義元の配役を全国募集するとともに、外国人も武者姿で参加している。

後者の事例は、全国的に結構多い。筆者が関わったものでは新潟県上越市の「謙信公祭」がある。これは郷土が輩出した上杉謙信の偉業を讃えて、謙信の居城・春日山城から市内までを武者行列にて行進し、市内広場では武田信玄との川中島合戦模様を再現し、多くの観光客を誘致している。

○風土性

地域のもつ風土的特性に立脚して創りあげた祭

りで、この代表的なものには北国の雪を素材にした札幌市大通り公園の「さっぽろ雪祭り」が挙げられよう。反対に南国の風土を生かしたものに、総延長五十^キメートルにも及ぶ砂丘の特性を生かした、鹿児島県南さつま市（旧加世田市）の「吹上浜砂の祭典」がある。今や北の「雪祭り」に匹敵する南の「砂祭り」として、その地位を確立した感がある。

○産業性

これは地域産業に焦点を当てた祭りであり、①「市場産業の振興を狙ったもの」と、②「商業振興を狙った祭り」とに分けられる。

前者で注目されるものに埼玉県加須市「日本一ジャンボ鯉のぼり」等がある。これは日本一の鯉のぼり生産地を全国にアピールしようと始められた祭りであり、なんと百メートルの鯉のぼりが利根川河川敷の上空にたなびき、多くの観光客が全国各地から訪れる。

後者の事例としては、神奈川県横浜市の「横浜港まつり」が挙げられる。市民や各企業が繰り出す国際仮装行列が目抜き通りを行進するもので、歴史と華やかさは日本でも有数の祭りであり経済効果も大きい。

○芸能娯楽性

これは大きく分類して①「地域伝統芸能を中心にした祭り」と、②「他の地域の芸能を取り入れた祭り」とに分けられる。前者の代表的なものとしては徳島市の「阿波踊り」や富山市八尾の「越中おわら風の盆」等がある。

後者は、他地域の芸能を移入した、いわゆる移植芸能と呼ばれるもので、その代表的なものは、昨今、全国各地で大流行の「よさこいソーラン踊り」であろう。

○社会性

まちづくりや市民連帯等を狙ったもので、いわゆる地域イベントと呼ばれる類の祭り形態である。筆者が関わったものとしては、神奈川県秦野市「秦野たばこ祭り」がある。

これは祭りの名称もユニークであるが、なんといっても、超特大のジャンボ火起し器での火起しコンテストの優勝チームの起した炎が祭りの進行を司るといったプロセスと、弘法大師伝説にちなみ、百八本のジャンボ松明に点火される祭りのファイナールは圧巻で、一日三十万人を超える観客動員数もすごい。

以上のように、祭りを支える特性はいろいろあるが、既存祭りの再生や新たな祭りづくりに取り組みとすれば、まず、どの祭りの手法が自分たちの地域にとってふさわしいのかを見極めることが肝心であろう。

祭り再生の現場から

では、ここで筆者が実際に携わった伝統的な祭り再生の事例を簡単に述べてみよう。

京都府宮津市に、約千二百年の伝統をもつといわれる「天橋立文殊堂出船祭」という伝統祭事がある。二十数年前まで行われていた祭事内容は、智恵の輪で有名な智恩寺文殊堂に端座する文殊菩薩の御開帳と、衆僧による厳粛な宗教儀式のほか



祭り当日、無数の万灯が阿蘇の海一帯を染め上げ幻想をかき立てる

には、天橋立の入江に万灯を照らし、夜空にかたちばかりの花火を打ち上げる程度であった。それでも戦後間もなくまでは、結構なお祭りとして近隣在所から見物客も多勢つめかけていたが、次第に客足が遠のき地元民さえもさほど関心を示さなくなっていた。だが、宗教儀式だからと



海上の船舞台では悪龍と文殊菩薩との闘いのドラマが繰り広げられる

細々ながらも、毎年の恒例行事として続けてきたのが実態であった。

そこで、「形骸化した祭りを活性化しよう」と立ち上がったのが、当時の地元の青年たちで、以下はそのときの祭り検証のためのチェック項目である。

1. 現在の祭りが地域の存在をアピールできるものになっているか（地域存在の証明）
2. 祭りの内容が地域らしさをもっているか（地域特性の固持）

3. 民族の魂が受け継がれたかたちの祭りになっているか（魂の継承）

4. 現代社会の悪弊に、現在の祭りが押し流されてはいないか（主体性の欠如）

5. 後世への継承という意味で誇り得るべきものであるか（伝統づくり）

6. 単なる保存でなく振興になっているか（前向きな取り組み姿勢）

7. 地域住民の創造性が祭りに反映されているか（創意工夫の注入）

8. 魂の悦びが現在の祭りにあるか（感動の共有）

9. 地域に連帯意識が生まれているか（チームワークの形成）

10. 展開に話題性はあるか（意外性と訴求効果）

11. 観客参加が十分加味されているのか（参加性の工夫）

12. 安易な方法で処理していないか（挑戦に対する緊張感）

13. 行う者、観る者の一体感が作り出されているか（参加体験による一体感演出）

14. 苦勞なしで最大の効果を上げるには、と考えていないか（苦勞なくして喜びなし）

15. 祭りを文化と捉えているか（祭り文化に対する誇りの高揚）

*

伝統的な祭りのテコ入れを考えている地域は、ぜひ、上記十五項目の観点から、既存の祭りをもう一度検証してみることをお勧めしたい。

さて、伝統祭事と言われる「天橋立文殊堂出船祭」も上記の項目がどの程度満たされているかのチェックが行われた。誌面の都合上、検証結果は



割愛するが、そうした作業を経て、祭りの由来にまつわる古文書をひもといた。

すると、古文書には「江戸期まで、切戸一帯と橋立明神の鳥居参道にまで篝火を焚き、その中を文殊菩薩を奉じた衆僧が船に乗って橋立明神まで渡御し、祭神の八大龍王の調伏と衆人祈願の護摩を焚き、仏事を厳かに行い、明け方までに元の切戸の本堂に戻り、文殊菩薩を環御した」とあり、この文面に誰もが驚いた。

現在行われている祭事内容とはだいぶ様子が違っていたからである。さらに、面白い伝説にもぶつかった。

「その昔、天橋立には悪龍が住み、海を荒らし、舟を壊し、人を呑み、悪事の限りを尽くし、人々はただ恐怖にあえぐのみであった。悪龍を何とか退治すべく、中国の五台山から文殊菩薩を招いた。文殊菩薩は夜更けに舟を出し、悪龍の住む天橋立に渡ると、壮絶な闘いの末に遂に悪龍を調伏させた。その後、悪龍は善龍に変身し住民の幸せを願って尽くすようになり、土地の人々は文殊菩薩の功德を称え、以来、海上に万灯を照らすようになったという。『出船祭』とは、文殊菩薩の渡御を意味する」とあった。

これまで何の感慨もなく称していた「出船祭」という呼称の由来もこれではっきりした。

そこで、伝説にあるように文殊菩薩と悪龍との闘いのドラマや衆僧による船上での海上法要を実現しようということになり、海上にしつらえられた浮き舞台での出船太鼓の乱打の中、火だるまになって乱舞する龍と文殊菩薩の化身との闘いのドラマが、阿蘇の海に繰り広げられた。

さらに、海面には無数の万灯が浮かび上がり、それまでの「天橋立文殊堂出船祭」には見られなかったダイナミックな海の祭りとして見事に蘇ったのである。一時は、消滅の危機さえあった祭りが、いまや、京都丹後を代表する一大伝統祭事として多くの観光客を誘致するまでになるとは、当時の地元民は誰しも想像しなかったという。

むすびにあたって

全国各地には、伝承的な祭礼がたくさん存在する。そのほとんどが改革される以前の「天橋立文殊堂出船祭」のように瀕死の状態に陥り、細々と継承している例が多いのではなからうか。

それらの祭りのイノベーションは、既存の祭りに単純に新しい要素を付け加えるのではなく、まず、祭りの成り立ちのルーツを調べあげることから出発すべきであると強調したい。

そして、自分たちの地域にとって、「いま、なぜ祭りなのか」をもう一度自問自答をしてみることである。それが解けたとき、祭りのほうからやってきて「これですよ！」と祭りの活性化メニューを提示してくれるに違いない。

つまり、祭り再生の方策は外的要素の注入ではなく、祭りそのものの存在するもので、それを確かな目で拾い上げることなのである。

拾い上げの作業が済んだら、その実現化に向かってわき目もふらずに一心不乱に取り組むことが大切で、そうしたプロセスを経て蘇生された祭りは、間違いなく期待以上の成果を示してくれるはずである。

★日本の祭り人気ランキングは…

日本には一体、祭りがいくつあるのか――。神社本庁が以前行った「全国祭祀祭礼総合調査」によると、その数は全国で三十万件にも達するという。まさに世界に誇る「お祭り大国」である。その中には、毎年多くの観光客を集める大規模な祭りやイベントも少なくない。そこで、人気度の高い祭りを、民間のアンケート調査結果を基に探してみると…。

まずフォートラベル社が公表した「日本の人気祭りランキング」(二〇〇八年)では、「今年行ってみたい日本のお祭りは？」との問いに、一位は青森市の「青森ねぶた祭り」だった。二位は富山市八尾町の「おわら風の盆」、三位は京都市の「祇園祭」という。

以下、ベスト10に入ったのは阿波踊り(徳島市)、博多どんたく(福岡市)、よさこい祭り(高知市)、岸和田だんじり祭り(岸和田市)、YOSAKOIソーラン(札幌市)、仙台七夕まつり(仙台市)、なまはげ(秋田県)の順。

他方、「五十歳以上が選ぶ、一度は訪れたい(訪れてもらいたい)祭りランキング」(gooooマスターズ、二〇〇九年)では、一位「さっぽろ雪まつり」、二位「青森ねぶた祭り」、三位「おわら風の盆」。こちらも以下、④阿波踊り⑤祇園祭⑥岸和田だんじり祭り⑦大文字の送り火(京都市)⑧高山祭り(高山市)⑨秩父夜祭(秩父市)⑩博多祇園山笠(福岡市)と、著名な祭りが続いている。

美味と景観を重視して交流促進

—料理人やグルメが集まる村づくり—



伊賀市農林振興課主幹

● 小林康志

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会での地域活性化策の柱として期待される。それを促進するには、移住交流ニーズに的確に対応するための仕組みづくりが必要である。当センターでは、地方が都市住民を受け入れる新たなビジネスモデルを創出し、移住・交流に取り組み場合、移住・交流受入システム構築のための経費を助成している。

今回は、平成二十一年度の助成対象となった三重県伊賀市の「料理人やグルメ人が集まる村づくり」事業をご紹介します。

美しい農村風景と美味しい料理があれば人は集まる

「最近ではグルメブームで料理人を目指す若者が多いが、個人が都内で独立開業するのは事実上不可能で

す。家賃などの固定経費が高すぎてとても難しい。かえって地方の方が可能性があります」。―(株)ぐるなびで飲食業を支援している小林達也さんから、こんな話をうかがった。

「住む人のいなくなった空き農家を改修して農家レストランにする。改修と言ってもお金をかけてピカピカにするのではなく、衛生管理上の必要最小限でいい。そうすれば開業費用は少なくて済みます」

「食材はできるだけその地方のものを食べたい。野菜もご近所から仕入れれば材料費も安くつく。伊賀市は、菜の花プロジェクトに取り組み、安全・安心で美味しい菜種油があるから、それも多いに使う」

小林さんの話はさらに続く。

「最初のお客はご近所を招待すればいいのです。そこで美味しい料理を提供できれば、その人たちが別のお客を連れてきてくれる。都会の親

戚とか友達をね。そうやって口コミで集客できれば、宣伝広告費もかかりません。美しい農村風景があって、そこに美味しい料理があれば、自然と人が集まり交流が生まれる。―

こんな会話の中から「料理人やグルメ人が集まる村づくり」事業はあつさり始まった。

著名シェフを招いて調理勉強会

農家レストラン開業に興味のある人を対象に、著名シェフを招いた地元食材の調理勉強会を開催することになり、市の温泉施設「さるびの温泉」に、元新阪急ホテル総料理長の渡辺俊彦先生をお迎えした。

同時に、伊賀市では遊休農地に菜の花やヒマワリを栽培し、美しい農村風景を作るとともに、菜種油等を地域の特産にしようと「菜の花プロジェクト」に取り組んでいるので、テーマは「菜種油を西洋料理に活用

すること」とした。

ビーフストロガノフやウィーン風豚肉のカツレツを試作して、参加者で試食したが、ビーフは風味が良くなり、カツレツは綺麗な黄色にカリッと揚がりとても好評だった。

次は比自岐という集落に、ヒルトン東京ベイホテルの宮本三料理長をお迎えした。比自岐地区は村を挙げて菜の花栽培に取り組んでいるので、今回のテーマも「菜種油を中華料理に活用すること」とした。

児童数が減り休校になった小学校の調理室を利用して、油淋鮮魚(ユーリンセンユイ)や青菜炒飯(チンツアイチャーハン)などを試作し、試食した。日常食べている中華料理とはひと味もふた味も違う洗練された調理方法を勉強し、中華料理に対す



マルシェ・ジャポン・キャラバンのにぎわい

る印象が変わったと好評だった。

両日ともほとんど全ての食材を地元農産物で調達したが、このことは調理の技術があれば地元食材でお客様を呼べる料理が出せるという自信につながった。また、これらの勉強会に使用する食材を集めていると、地域にはこだわりの美味しい農産物を作る生産者がたくさんいることを再発見した。

「伊賀のこだわり生産者が集合すれば面白いことになりますよ」と前述の小林さんからアドバイスをいただいたのがきっかけで、今年五月二十九〜三十日の両日、「マルシェ・ジャポン・キャラバン」というイベントが伊賀市で開催された。このイベントは「お洒落な農村市場を都会で開き、生産者と消費者を直接結ぶ」というコンセプトだが、大都會でもない当市で開催いただけたのは、地域の美味しい食材とこだわり生産者の集合効果だったと思う。両日とも遠方からお客様がたくさん来られてとても盛況であり、一過性に終わらせず継続していけば新しい交流が生まれるという手応えを感じた。

滋賀県から全国に広がった「菜の花プロジェクト」

伊賀市では「菜の花プロジェクト」に取り組んでいると前述したが、菜

の花プロジェクトとは、①菜の花の栽培②菜種油の搾油③廃食油を回収し、それを原料にBDF（バイオディーゼル燃料）を製造する④軽油の代替としてBDFを利用——というふうな、地域内を資源が循環する環境に優しい取り組みである。

これは滋賀県で始まった取り組みで、今では全国的で多くの自治体やNPOが熱心に活動している。当市もその末席に加えていただいているが、当市独自の特徴は「美味」と「景観」を重視し、移住・交流につなげようとしている点である。

「美味」については、伊賀市自前の搾油施設を整備し、通常の菜種油とは一線を画した、エキストラバージン菜種油を製造し、特産品にしようとしている。通常の菜種油は原料の菜種を加熱・焙煎してから搾油し、天ぷら油や炒め油に利用するが、エキストラバージン菜種油は非加熱で搾油することから、オリーブオイルのようにドレッシングやマリネに利用するとても美味である。

また、オリーブオイルは冷蔵庫に入れると固まってしまうが、菜種油は植物油の中で最も粘度が低くサラサラなので固まらず、とても使い勝手が良いものである。加えて、搾油作業の前に「秘伝のひと手間」を加

えるので、きれいなレモン色に仕上がりが、優しい香が漂う。今後は三重大学の先生方と連携して、成分分析や機能性を評価して、美味に加えて健康面からの特産品としての価値を向上させていきたいと考えている。

列車の窓から種をまき沿線を菜の花で一杯に

「景観」については、美しい菜の花畑をグリーンツーリズムの主役のように取り組んでいる。伊賀市には旧近畿日本鉄道の支線である伊賀鉄道が現役で運行しているが、この列車を「菜の花列車」に仕立て、乗客に窓から種まきしてもらい、沿線を菜の花で一杯にしようというもの。

伊賀鉄道の協力で、駅と駅の途中で電車を止めて種をまくという前代未聞のイベントも好評だった。現在、

市内では三十鈴の菜の花が栽培されているが、早期に百鈴を実現したいと関係者一同、意気込んでいる。

海にしようか山にしようか、それとも海外まで足を延ばそうか。自身自身が旅行の行き先を考えるとき、決め手はやっぱり美味しいものが食べられて、景色が美しいところを選んでしまう。北海道の雪景色を見ながらじゃがバターを頬張るとか、四十万川の清流を見ながら天然うなぎをいただくとか、想像するだけで楽しくなる。

美しい風景を見ながら美味しいものを食べたい時に、「それじゃあ伊賀に行こう」と思っていただけけるような取り組みを地道に続けてゆけば、移住・交流につながるのではないかと感じている。



ヒルトン東京ベイホテル料理長を招いた勉強会



搾油施設「菜の舎」の外観

角館外町の「蔵」を後世に残す活動

「武家屋敷の内町とともに観光客誘致めざす」

仙北市は、秋田県の東部中央に位置し、平成十七年に角館町、田沢湖町、西木村が合併して誕生した市である。市のほぼ中央に水深が日本一である田沢湖があり、東に秋田駒ヶ岳、北に八幡平、南は仙北平野へと開けている。

今回の取材で訪れた角館地区は、仙北平野の北部に位置し城下町として発展してきた。玉川と松木内川に沿いに市街地が拓け、三方が山々に

囲まれたこの町は、歴史ある武家屋敷と桜並木の「内町」と多数の蔵が点在する「外町」に区分されている。

NTT跡地を利用し、
観光客をどう呼び込むか

そんな外町の中央にあったNTT角館の事務棟が、平成十五年に取り壊されることになった。それまで内町には多数の観光客が回遊していたが、外町まではあまり回遊していな

かった。それを何とかして外町にも

観光客に訪れてもらうため、NTT角館の跡地を利用し何かできないか、との思いから結成されたのが、今回訪問した「角館まちづくり研究所」である。事務局の堺研太郎氏が話をうかがった。

現在、角館まちづくり研究所のメンバーは自営業者やサラリーマンなど民間人十七名で構成されている。構成員を増やすこともできたが、機動力や参加率の低下を防ぐためメンバーを増やさずに活動している。

団体設立の理由だったNTT角館の跡地は、平成二十年に外町交流広場として新しく建設され観光客の休憩場になっている。NTT角館跡地の問題が片付いた時、「内町から外町に観光客を呼ぶにはどうすればいいか?」「外町には人を呼ぶほどの魅力があるのか?」という考えに

至ったという。

堺氏によると、ちょうどそのころ、外町の蔵が取り壊されている現状を知り、「これではいけない」という思いと、「多数の蔵を利用したまちづくりができないか」という思いが湧き立った。だが、外町に多数の蔵があるのは知っているが、どのような蔵が何棟あるかといった正確なことを誰も知らなかった。

角館地区には百一もの蔵が存在

そこで、メンバーで手分けして蔵の調査を開始した。造られた年代、使用目的、蔵の状態等を調べ、一部の蔵は図面を引き形状を記録していった。調査の結果、角館地区には百一もの蔵が存在していた。専門家の目から見ても内町・外町の限られた面積に百一もの蔵があることは評価された。

また、蔵の中を調べると、所有者も知らない古文書、昔のおもちや、食器、江戸時代のお雛様などの発見もあった。これら貯蔵品を利用したイベントも開催しており観光客誘致に一役買っている。

ひと通り調査が終わり、今度は蔵を使ったイベントを企画し開催した。それが平成二十二年二月十日か

★ 団体プロフィール ★

設立年=平成17年4月
設立・運営主体=自主的組織
(コミュニティ組織)
代表者=菊池 道廣
会員数=17人
<連絡先>
〒014-0368
仙北市角館町中菅沢92-81
電話 (0187) 54-2367



堺 研太郎氏



享保年間から続く醸造元の安藤家



母屋と5棟の蔵からなる西宮家

ら十四日まで開催された「蔵伝」である。これは外町にある「太田家の二棟の大蔵」と呼ばれる蔵で開催され、蔵調査で判明した蔵年表、発見された貯蔵品などが展示された。

また、餅つきやおしるこの配給を行い、参加者に喜ばれた。十一日には蔵の保存、再生、活用に向けてシンポジウムを開き寒中、五十人を超える地元の方の参加を得た。その中で蔵を維持する大変さや、「いかに維持・保存、活用をしていくか、継続的にみんなで考えよう」といった意見が出た。

現在、外町にある西宮家や安藤家ではレストランや物品販売等が行われている。西宮家は外町交流広場のすぐ隣に位置しており母屋と五棟の

蔵からなっている。その五つの蔵を

地元・角館産の低農薬米と新鮮野菜を生かした洋風郷土料理が楽しめる「れすとらん北蔵」や、角館を代表する桜皮細工やお菓子等の販売、お茶会・句会などコミュニティの空間として利用している。

レストランや販売蔵では、太い梁を直接見ることができ蔵の重厚さを体感できる。また、安藤家は角館地区では珍しいレンガ造蔵座敷で享保時代が続く醸造元であり、醤油、味噌、漬物などを販売している。

角館のすべての蔵を 写真集に収める取り組みも

今後の角館まちづくり研究所の活動としては有名な蔵だけでなく、角館地区にある蔵すべてを写真に収め、所有者の蔵に対する思い出な

どを添えた写真集を作成するため活動している。これは三年間かけて一万枚の写真を撮る予定である。また、将来的に蔵を借りたい、貸したい、売りたいと言った思いをつなげる蔵バンクを設立したいとのことだった。

写真集や蔵バンクの取り組みは蔵に対する思い入れや、蔵の有効活用などを模索し角館地区の蔵を少しでも後世に残すための取り組みであるようだ。

堺氏が蔵の保存に尽力するのは次の理由からだ。

「日本全国にある蔵は、形は似ていてもその地域々々で構造がまったく違う。九州地方の蔵は台風から蔵内の物を守るため、東北地方は雪等から守るためそれぞれその土地の材料を使い建てられている。すなわち蔵はその地域を代表する文化である。これから現存する蔵と同じ規模のものを作ること

くことは日本の文化が廃れていくことと同じである」。

今回の取材では、角館まちづくり研究所の蔵の保存に対する熱い思いやまちづくりにかける情熱を随所で感じる事ができた。それは外資などの流入によるどこにもある観光地化を防ぐため、蔵を利用した営業には地元角館を意識している点や、蔵を維持管理するには所有者の意識が大切である、と言う思いからの写真集作成や蔵を開放した蔵伝などの取り組みからもうかがえる。

最後に堺さんに団体活動が続ける上で重要なことを尋ねると、「団体活動を長く続けるためには、活動の結果が目に見えて分かる必要がある。目に見えるからこそモチベーションが上がりが活動が続けられる」と語ったのが印象に残った。

団体活動が続けることは人材面や金銭面でかなり大変なこともあるが、まちづくりは一朝一夕にはできない。メンバーのモチベーションのみで解決できることばかりではないが、継続的に活動するためにはとても大切なことだと思った。今後、角館まちづくり研究所の活躍により角館地区がさらに発展することを期待したい。

地域への愛着がまちをつくる

―駅高架が生んだ商店街・大学・住民の連携―

大阪市中心部から東へ十五キロほどの位置に立地する寝屋川市。高度経済成長に伴い住宅都市として発展してきた当市は、人口約二十四万三千人を有する特例市である。

市のほぼ中央を南北に走る京阪電鉄の寝屋川市駅は、市内鉄道駅の中で最も乗降客が多く、市の玄関口としての役割を担ってきた。

今回は、この駅周辺の商店街を中心にまちづくりに取り組む、寝屋川

市駅周辺まちづくりネットワーク（以下「ねやまちネット」）の活動について、三和清明副理事長、西尾博理事に話をうかがった。

少子・高齢化で駅周辺の商業は厳しい状況

「ねやまちネット」が設立される背景には、駅西側の大利商店街おとしで独自に行われてきた活動がある。車社会の発達、大規模店舗の郊外への進出、少子・高齢化などにより、駅周辺商業は厳しい状況に陥っていた。

そこで大利商店街では、商店街からどのようにまちづくりを行っていくかを模索する中で、平成十四年三月に「商店街活性化まちづくり基本構想」を策定するとともに、地域通貨「げんき」の発行を開始した。

ボランティア活動を通じて商店街で買物ができるこの仕組みは、ボ

ランティアと商店街が一体化した最初の取り組みと言える。

さらなる契機となったのは、同年十二月の京阪電鉄寝屋川市駅高架化と、駅周辺地区の再開発事業である。特に高架化は、これまで駅を挟んで分断されていた東西の商店街を一元化した。

この時、双方は、顧客の囲い込みではなく、一元化した商店街を中心としたまちづくりに協働で取り組むことを目指し、駅西側の大利商店街と駅東側の一番街商店街、それに地域住民が参加して、「寝屋川市駅前地区まちづくり構想」を策定した。この構想には駅前地区の町の現状・課題等が盛り込まれた。

この時立ち上げた検討委員会に住民やNPO、地元大学教授も加わり平成十八年に設立されたのが、ねやまちネットである。

「くつろぎ」「賑わい」という二つの視点から「ふれあいのあるまちづくり」をコンセプトに掲げ、ねやまちネットは活動を開始した。

「今まで抱いていた、まちづくり行政の仕事、というイメージに違和感を抱き始めたことも要因」とする西尾氏は、次のように語った。

「行政は生活者の要望を見極めながら、優先順位をつけて住民サービスを提供しなければならない。生活者が不便に思うことは、生活者の段階で改善できるのが一番の理想。まずは、自分たちでやれる範囲のことからやってみようという思いが、ねやまちネットの設立につながった」

やれることから始めた事業は、四年間で多岐にわたる。

大学との連携によるロボット教室

取り組み事業の一つに「ロボット教室の開催」がある。市内に大学・高専を併せて三つの学校があることに着目し、科学の時代を生きる子供たちに、ものづくりの楽しさを味わってもらおうと始めた事業だ。

今年度で四回目となる教室は、寝屋川市とその周辺三市の小・中学生から参加者を募集する。製作するロボットの精度の高さもあり、参加希

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成18年3月
設立・運営主体＝特定非営利活動法人
代表者＝清水 茂貴
スタッフ（ボランティア含む）＝54人
＜連絡先＞
〒572-0042
寝屋川市東大利町11番1号
電話（072）826-4701



空き缶回収機械「エコキャビン」



ロボット教室の様子

「エコキャビン」事業

望者は百人を超え、人気を博している。寝屋川市駅前の電気通信大学生との交流はもちろん、親と子のふれあいの場ともなっている。

駅前商店街付近には、現在、「エコキャビン」と呼ばれる空き缶回収機械が三カ所設置されている。キャビンは各商店街で管理・運営を行っており、売れるアルミで得た収益は、

自治会・NPOへの寄付のほか、寝屋川市全域へ拡大開された地域

通貨「げんき」の購入にあてられるという。

音楽を通じたにぎわいの創出

「ステージみたいな場所があれば、そこで演奏してみる気はあるか？」。

駅前で演奏する若者に、ねやまちネットのメンバーが声をかけて回ったところから「寝屋音事業」は始まる。

若者たちに駅前で演奏する場所を提供するこの取り組みは、音楽を通じてネットワークを活用して進んだ取り組みである。毎月第三土曜日、駅前広場では演奏者達自身がステージ・音響設備の設置を行い、歌声を披露している。それまでばらばらだったストリートミュージシャンの集合体は、駅前のにぎわい創出に役割を買っている。

「ねやまちネットは、取組み事業の全てにおいて中心的役割を担っているわけではない。事業ごとに実行委員会が立ち上げられていて、運営はそれぞれで行っている。」と三和氏は語る。前述したロボット教室、エコキャビン、寝屋音の取組みは、それぞれ実行委員

会が存在する。ねやまちネットは、ニーズの把握と集約、実行委員会による事業開始までの支援を行う役割を担っている。

新たに駅周辺のまちづくり グラウンドデザイン作成

もう一つの取り組みとして、「寝屋川市駅周辺まちづくりグラウンドデザイン」の作成がある。これは、行政と協働で進めるまちづくりや、地域・市民が主役となって進めるまちづくりの方向・施策提案を目的としたものである。ねやまちネットが中心となり、市民、自治会、市民活動団体等とともに、ワークショップ、先進事例視察、講演会などを一年をかけて行い、駅周辺の特性と課題、まちづくりの方向性等のグラウンドデザインを描いている。

さらに、このグラウンドデザインの実現に向けて、平成二十一年度は商店街の通行量、駅前親水公園の利用状況を把握し、まちづくりの課題を抽出した。今後は、行政と連携しながら今回の結果をまちづくりに反映していく。

ソフトは住民が主体となつて

「寝屋川のように住民主体のまち

づくりの根底にあるものは、まちへの愛着や愛郷心」と、三和氏は熱く語った。

「ハード面は行政に頼らざるを得ないが、ソフト面は地域に愛着をもつ住民が主体となって取り組み、行政への提言も行っていく。そのことが、ハード・ソフトにハートすなわち心のこもった、効率のよいまちづくりにつながると考えている」

また、ねやまちネットの構成員は年齢層が高く、働き盛りの世代や若者の参加はまだ少ない状況である。さらに、長く続けていく必要があるまちづくりの取り組みには、しっかりとした事務局の必要性も感じているという。

「人件費の問題はあるが、これまでの取組みを続けていくためにも、事務局機能の強化が今後の課題。また、取り組みへの住民参加は、地域への愛着や愛郷心の表れであり、多くの住民が参加できるよう様々な機会を設けながら、将来的には駐輪場経営なども視野に入れた自主経営基盤の確立を目指している」

寝屋川のまちに愛着をもつ多くの住民によって、ふれあいのあるまちづくりは一步一步、確実に進んでいることが感じられた。

日本一長い足湯の効果

―地元挙げた湯治客おもてなし作戦―



小浜温泉観光協会会長 ● 山下浩一

は足湯フイーバーとなった。

熱量日本一にちなんだ長さが：

かつては湯治場（長期滞在）型温泉地として栄えていた小浜温泉だが、近年は湯治客の減少で連泊客も減っている。これを打開しようと、「どうすれば以前のようなにぎわいが戻るのか。どうすれば、他の温泉地との差別化が可能か」を念頭に、一大プロジェクトが動き出した。

足湯といえば、既に全国に多数存在しており、他の施設との差別化が課題だった。そこで、これまで十分に宣伝していなかった「熱量日本一（源泉温度×湧出量）」を前面に掲げ、小浜温泉を体感できるような施設とすることを柱にした。

源泉温度一〇五度にちなみ、一〇五メートルの長さで湧出量をアピールしよう、源泉かけ流しとした。このため、当初はこの一〇五メートルが足湯の長さとしては「日本一」であるかどうかを意識していなかった。それが分かった時から、「日本一長い足湯」をキャッチフレーズに使うことにした。

しかし、これだけではインパクトに欠ける。そこで高低差をつけ「流れる足湯」を整備することで湯の流れを体感してもらおうと、段差をつ



ウォーキング足湯

け滝のように見える「湯の滝」を設置することにした。さらに、ただ足を温めるだけではなく底部に玉砂利を埋め込み、足つばの刺激ができる「ウォーキング足湯」、ペットも入れる「ペット足湯」を設け、多様なニーズに対応できるよう工夫した。

このほか、一〇五度の温泉を冷ますための「湯棚」や、小浜温泉の高温の温泉を実際に利用・体験できるように「蒸釜」を併設した。食材を持ち込めば無料で利用できる「蒸釜」は、観光客のみならず地元住民も気軽に利用でき、好評である。

ハード面だけでなく、観光客が温泉まち歩きできるよう、地元の各種団体との取り組みも始めた。一年にもおよぶ講義や学習会を開催し、ボランティア観光ガイドを育成。現在では「おばま温泉観光ガイド」と称し、一人三百円で、小浜の歴史・自然・地域などを楽しく案内し、観光



ボランティアの小浜温泉観光ガイド

客に喜んでいただいている。

また、地元の農業、漁業、商工業者により、軽トラ（または軽自動車）の荷台で商品を販売する「軽トラ朝市」を毎月第四・日曜日の午前中に開催。地元産品が低価格で購入できる。軽トラ朝市で購入した農産物を「蒸釜」で調理し召し上がることもできる。

このほか、観光地という地域柄、旅館関係者はもちろん地域の方を対象に、韓国語講座や手話講座を開催し、様々な観光客に対応できるようにおもてなしの体制を整えている。今後は中国語講座やフラワーアレンジメント講座も予定している。

温泉街に幾分活気戻る

足湯開設から四カ月余り。「ほつとふつと105」の整備と地元挙げたまちづくりの取り組みの成果が、観光客が温泉まち歩きをしている姿が多く見られるようになった。

また「日本一長い足湯」を新聞やテレビなどが紹介してくれたおかげもあって、宿泊者数にも変化が見え始めている。以前のような活況とまではいかないが、温泉街に幾分、活気が感じられようになった。

課題はまだある。「ほつとふつと105」まわりの夏季対策や雨天対策などの改善点もある。できる限り早急に改善し、何度も訪れたいくなるような小浜温泉を目指し、取り組みを継続したいと考えている。



北杜市長 ● 白倉 政司

人と文化が躍動する 「環境創造都市」を目指して

北杜市のすばらしさを全国の皆さんに知っていただきたく、少し紹介させていただきます。まずは、生い立ちから。

平成十六年十一月一日、山梨県の北西部に位置する八つの町村が合併し、人口約五万人、山梨県で最も面積の大きな市「北杜市（ほくとし）」が誕生しました。長野県との県境に位置し、八ヶ岳連峰をはじめ、甲斐駒ヶ岳から連なる南アルプス、茅ヶ岳、金峰山、瑞牆山など日本百名山にも選ばれた美しい山岳景観に囲まれたまちです。この機会に北杜の自慢と政策を少々述べたいと思います。

豊富な環境資源

市内には、河川や湧水が数多く存在し、三つの名水百選を有していることから、「名水の里」と称され、豊富で良好な水資源を誇っています。そして、高原性の気候、日本で一番長い日照時間、また国蝶オオムラサキの生息数日本一、など素晴らしい環境資源の恩恵を受けながら生活しています。この環境を次世代に引き継ぐことが私たちの責務と考え、「環境日本一の潤いの杜づくり」を目指し環境施策に積極的に取り組んでいます。

その一例として、「小水力発電所」の建設や、国の委託事業である「大規模太陽光発電施設の実証研究施設」を誘致するほか、今年度は、市内小中学校に太陽光発電システムを導入し、地球温暖化問題への意識の高揚と、低炭素社会の実現に向けた取り組みを、市独自に取り組んでいます。

恵まれた文化施設と原っぱ教育の推進

本市内には、平山郁夫シルクロード美術館、金田一春彦記念図書館を代表とする文化施設が、数多く存在しています。次世代を担う子ども達へ「原っぱ教育」を提唱するなかで、教育に資する地域資源の存在は、郷土を愛し、豊かな心を育む資材になると考え、文化と教育の推進に努めています。また、市民が一流と言われる芸術、文化にふれる機会を設けるため「芸術文化スポーツ振興

基金」を創設し、市民一人ひとりのグレードアップに寄与できることを期待しております。

市内には、先に紹介したように、豊かな自然と多くの文化施設といった「癒しの空間」が数多く存在しています。これらを最大限に活用し、上質な時間や、空間を提供することを目的に「長期滞在型リトリートの杜」宣言を行い、暮らす感覚で地域とコミュニケーションできる滞在プランの提供を目指しているところです。また、ミキハウス子育て総研の選定事業「ベビーズヴァカンスタウン選定プロジェクト」の「子連れ旅行にいい観光地第1号」としても選定されましたので、子育て世代の皆様にも安心してお過ごしいただけるまちづくりを更に推進しています。

食と農の推進

日本穀物検定協会主催の食味ランキングで平成二十年度の梨北米が、日本一おいしいお米の称号をいただきました。これに誇りを持ち、引き続きおいしい梨北米を生産すること、健康な暮らしの第一歩である。朝ごはんを市民が毎日欠かさず食べ、満ちあふれた自然の恵みから学び、食に関心を持ち、生涯にわたりみんなが健康で暮らせることを願い、昨年開かれた市政五周年の記念式典において「おはよう！朝ごはん宣言」を行いました。また、この梨北米は、平成二十一年度産の食味ランキングにおいても最高ランクの特Aに選ばれ、出品以来五年連続で選定していただきました。

最後に

PRしたいことはまだまだありますが、ここに紹介した政策実行の過程には、北杜を愛する地域の方々の力添えを感謝せずにはいられません。これからも市民とともに、地域資源を存分に守り、生かし、常にチャレンジ精神と改革意識を持ったベンチャー自治体として、力みながら「ふるさと北杜市」を築くために、未来に向けて限りなく努力していきます。

新しく架け替えられた
伊勢神宮宇治橋
(伊勢市)

うま 美し国 三重

紅葉の赤目四十八滝
(名張市)

三重奏

三重県

都道府県漫遊
POSTER GALLERY

地域づくり

2010・7月号 46

手前みそ
ですが…

群馬県

渋川市

138

「日本」のまんなか 水と緑といで湯の街 渋川市」。このキャッチフレーズを掲げる渋川市は、日本そして群馬県のほぼ中央部、雄大な関東平野の始まる所に位置する。

赤城山をはじめ榛名山、小野子山、子持山に囲まれ、利根川と吾妻川が市の中央で合流する山紫水明な人口8万5千人余りの都市である。市内には、石段街で有名な、日本を代表する名湯・伊香保温泉をはじめ、泉質の異なる魅力的な温泉施設が各所にあり、多くの観光客が訪れる。

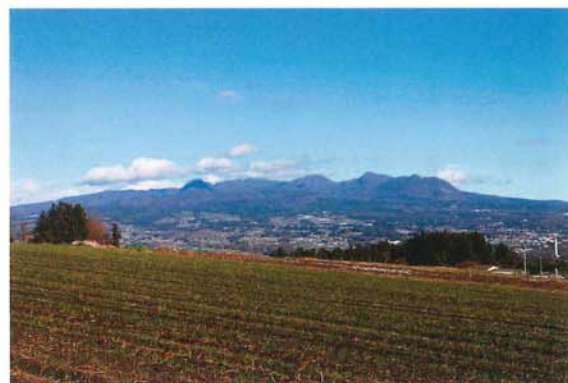
水と緑に恵まれた渋川の大地は、たくさんのお土産を生み出している。リンゴやイチゴ、ブルーベリーなどの観光果樹園、全国一の収穫量を誇るコンニャク、地元産の粉を使ったそば、日本三大うどんの一つ、水沢うどん、川風を浴びながらアユ料理を楽しめる梁とさまである。

また、本市には数多くの祭りがある。その中の1つ、市民祭である「渋川へそ祭り」は、本市が日本のまんなか、「へそ」に位置することから昭和59年に始まった。夕暮れどきから始まるメインイベントのへそ踊りパレードでは、それぞれがおなかに好きな絵柄の顔を描いて、「はら出せヨイヨイ、へそ出せヨイヨイ」の音頭に合わせて踊る。大きく膨れたおなかが揺れる様子は圧巻だ。

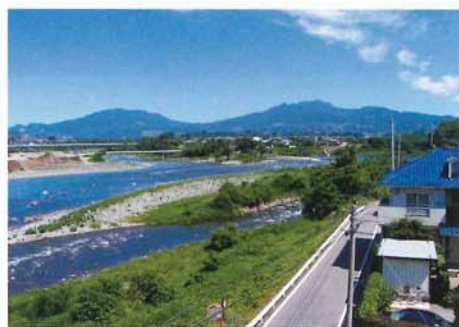
ぜひ、魅力と活力ある渋川市へお出掛けください。



■渋川の夏の風物詩「渋川へそ祭り」



■すそ野が広がる赤城山



■利根川から望む小野子山、子持山



■水と緑に恵まれた大地から生み出された名産品



■日本三大うどんの一つ、水沢うどん



■収穫量日本一を誇るコンニャク



■伊香保温泉の名所、石段街

平成22年度地域再生実践塾 参加者募集！

地域再生の方法について、さまざまな視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を全国5カ所で開催します。詳しくは、ホームページ等でお知らせしています。

◆開催内容

- | | |
|--|---|
| <p>▽第1回 まちづくりにおける協働の役割（北海道札幌市）
 主任講師：石塚 雅明氏
 （（株）石塚計画デザイン事務所代表取締役）
 開催日：7月12日（月）～14日（水）
 申込締切：申込みは締切しました</p> <p>▽第2回 地場産業の再生による地域活性化
 （新潟県燕三条地域）
 主任講師：小浦方 格氏
 （新潟大学地域共同研究センター准教授）
 開催日：9月6日（月）～8日（水）
 申込締切：8月16日（月）</p> <p>▽第3回 文化・芸術によるまちづくり（香川県小豆島町）
 主任講師：竹内 守善氏
 （香川県地域振興アドバイザー）
 開催日：9月28日（火）～30日（木）
 申込締切：9月7日（火）</p> | <p>▽第4回 都市農村交流を通じた地域づくり
 （和歌山県田辺市）
 主任講師：藤田 武弘氏（和歌山大学観光学部教授）
 開催日：10月27日（水）～29日（金）
 申込締切：10月6日（水）</p> <p>▽第5回 まちなかに人を呼び込む仕掛けと仕組み
 （熊本県熊本市）
 主任講師：溝上 章志氏
 （熊本大学大学院自然科学研究科教授）
 開催日：11月17日（水）～19日（金）
 申込締切：10月27日（水）</p> |
|--|---|

◆対象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる人

◆募集人数 各回40名～50名（会場などにより変動あり）

◆参加費用 無料（開催地までの往復の交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）

◆申込方法 申込書を当センターまで送付してください。

申込書の様式は当センターのホームページからダウンロードできます。

*詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】業務課 TEL 03-5202-6137

地域づくり団体等活動支援事業のお知らせ

地域づくり団体全国協議会は、地域づくり団体の活動を応援する助成事業「地域づくり団体等活動支援事業」を行っています。

①講師等派遣事業

都道府県協議会及び地域づくり団体が行う研修会、講習会等への講師招へいに要する経費に対して助成します。謝金、旅費各10万円、計20万円が上限です。

②地域づくり活動支援事業

地域づくり団体が行う、地域づくり誌やホームページの作成等についてのアドバイザー招へいに係る経費に対して助成します。謝金、旅費各10万円、計20万円が上限です。

助成の申請は、研修会など開催2カ月前まで随時受け付けています。

申請手続きなどについては、地域づくり団体全国協議会のホームページを御覧になるか、お住まいの地域の「地域づくり団体都道府県協議会」にお尋ねください。

（ホームページURL）<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/dantai/dantai.htm>



平成21年度の講習会の様子

7月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 7月1日(木)～2日(金)
行方市(茨城県)
- 7月8日(木)～9日(金)
千葉市(千葉県)
- 7月15日(木)～16日(金)
アルプスの風観光推進協議会(長野県)
- 7月20日(火)～21日(水)
山梨市(山梨県)
- 7月22日(木)～23日(金)
中国五県物産観光協議会(中国地方五県)
- 7月26日(月)～28日(水)
社団法人やまなし観光推進機構富士の国やまなし館(山梨県)

★有楽町ふるさと情報プラザ

テーマ:「夏だ! 祭りだ!」

- 7月5日(月)～7日(水)
「夏! 魅力いっぱい! 三浦半島」
逗子市(神奈川県)
- 7月8日(木)～9日(金)
「今年の夏は小田原に行こう!! 一日帰りで楽しむ! 泊まりで満喫! ？」
小田原市(神奈川県)
- 7月13日(火)～14日(水)
「今年の夏は安らぎの郷で! 兵庫・但馬(たじま)・夏ツーリズム」
兵庫県
- 7月15日(木)～16日(金)
「道の駅果樹公園あしがくぼ プラムまつり」
横瀬町(埼玉県)
- 7月21日(水)～22日(木)
「三河の夏、一色のうなぎ・大提灯」
一色町(愛知県)
- 7月23日(金)～24日(土)
「高原の夏、南箕輪村からの贈り物」
南箕輪村(長野県)
- 7月26日(月)～30日(金)
「長野県森林セラピーへのお誘い」
長野県

(写真)

- 1 5月12日(水)～14日(金) 御前崎市(静岡県)
- 2 5月26日(水)～28日(金) 【魚沼市】越後魚沼山菜物産展実行委員会(新潟県)
- 3 5月31日(月)～6月2日(水) 山梨県
- 4 6月1日(火)～2日(水) 【ええじゃないか豊橋! 観光物産展】
豊橋市(愛知県)
- 5 6月3日(木)～4日(金) 【まるごと夏休みinさんむ(九十九里浜の真ん中で遊びつくせ)】 山武市(千葉県)



8月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 8月2日(月)～3日(火)
華やいて大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会(大阪府)
- 8月26日(木)～27日(金)
利根郡片品村(群馬県)

★有楽町ふるさと情報プラザ

テーマ:「人と地球にやさしい旅」

- 8月4日(水)～6日(金)
「香川・瀬戸内の暮らしと物産フェア」
香川県
- 8月10日(火)～13日(金)
「住んでよく 働いてよく 訪れてよい村」
沖繩恩納村物産展
恩納村(沖縄県)
- 8月16日(月)～18日(水)
「とれたて船橋・自然からの贈り物」
船橋市(千葉県)
- 8月19日(木)～20日(金)
「疲れたあなたにビタミンアイ 秀麗富嶽十二景写真展」
大月市(山梨県)
- 8月24日(火)～25日(水)
「今残したい片品の景観と食」
片品村(長野県)
- 8月26日(木)～27日(金)
「新鮮! 美味しい! ハケ岳高原・原村からのおくりもの」
原村(長野県)
- 8月30日(月)～9月2日(木)
「高原山麓水街道フェア2010」
栃木県



【編集後記】

▼梅雨が明ければ、各地で夏本番。夏祭りが本格化します。祭りと言っても、大勢の観光客が訪れるメジャーな祭りから、花火大会や町の盆踊りまで多種多彩。四季それぞれの祭りは、地域に欠かせない風物詩でしょう。

▼本号の特集テーマは「祭り文化の再生と地域活性化」です。各地の歴史・文化や生活に根付いた伝統行事と地域の関係を探りました。紹介した事例の多くは、廃れたり一時中断した伝統行事を、住民らの手で復活させ、新しい祭りづくりに取り組んでいるケースです。

▼そこからは、過疎化や高齢化など地域の事情で衰退した祭りが住民らの努力で甦り、子孫に継承していくという意気込みが伝わってきます。同時に、こうした取り組みが、地域住民の絆を強め、郷土への愛着を高める役割を果たしていることも感じられます。

▼祭りの効用や行政の課題などについては、同志社大学の伊多波教授の総括論文、地域プロデューサー二瓶氏の論文が示唆に富みます。



▼当センターの所在地、東京・日本橋界隈でも六月中旬、二年に一度の日枝神社「山王祭」が催されました。センターの職員五人も参加し、半被姿で慣れない神輿担ぎに挑戦しました。
(原田)

【8月号予告】

特集II コミュニティ・レストランと

まちづくり(仮)

地域づくり7月号

2010年7月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。情報サービス課(03-5202-6135)まで、ご連絡下さい。

歳月を越えて たどりつくところ。

ひとしずくずつが集まって流れになるように。

一人ひとりの夢が集まって大海原級のパワーになります。

行きつく先は、身近な暮らしの快適さ。そして、皆さまの笑顔です。

宝くじの収益金は、身近な街づくりに活かされています。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。



財団法人 **日本宝くじ協会**

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>